

惡獸篇

泉鏡花作

一

つれの夫人が一寸道寄りをしたので、銚太郎は、
取附きに山門の峨々と聳えた、巨刹の石段の前に立
留まつて、其の出で来るのを待ち合せた。

門の柱に、毎月十五十六日當山説教と貼紙した、
傍に、東京 中學校水泳部合宿所と又記し

である。透して見ると、灰色の浪を、斜めに森の間
にかけてやうな、棟の下に、薄暗い窓の數、巖穴の
趣して、三人五人、小さく彼方此方に人の形。脱ぎ
棄てた、浴衣、褌衣、上衣など、ちら／＼と渚に似
て、黒く深く、背後の山まで凹になつたのは本堂で
あらう。輪にして段々に點した蠟の灯が、黄色に燃
えて描いたやう。

向う側は、袖垣、枝折戸、夏草の茂きが中に早咲
の秋の花。いづれも此方を背戸にして別荘だちが二

三軒、廂に海原の緑をかけて、簾に沖の船を縫はせ
た拵へ。勿釣瓶の竹も動かず、蚊遣の煙の摩くもな
き、夏の盛の午後四時ごろ。濱邊は煮えて賑かに、
町は寂しい樹蔭の細道、たら／＼坂を下りて来た、
前途は石垣から折曲る、しばらく此處に窪んだ處、
丁度其の寺の苔蒸した青黒い段の下。小溝があつて、
しばまぬ月草、紺青の空が漏れ透くかと、露もはら
／＼とこぼれ咲いて、藪は自然の寺の垣。

丁度其のたら／＼坂を下りた、此の竹藪のはづれ
に、草鞋、草履、駄菓子箱など店に並べた、屋根
は茅ぶきの、且つ破れ、且つ古びて、幾秋の月や映
し、雨や漏りけむ。入口の土間など、いにしへの
沼の干かたまつたを其のまゝらしい、廂は縦に、壁
は横に、今も屋臺は浮き沈み、危く掘立の、柱々、
放れ／＼に傾いて居るのを、渠は何心なく見て過ぎ
た。連れは其の店へ寄つたのである。

「昔

昔、浦島は、

小兒の捉へし龜を見

て、あはれと思ひ買ひ取りて、

と、

誦むともなく口にしたのは、別荘のあたりの夕間暮

れに、村の小兒等の唱ふのを 聞き覚えが、折から
心に移つたのである。

銚太郎は、不圖手にした巻苧に心着いて、唄をや
めた。

「早附木を買ひに入つたのかな。」

うつかりして立つたのが、小店の方に目を注いで、
「あゝ、然うかも知れん。」と夏帽の中で、頷
いて獨言。

別に心に留めもせず、何の氣もなくなると、つい、
うか／＼と口へ出る。

「一日大きな龜が出て、か。まをし／＼浦島さん

ー

帽を傾け、顔を上げたが、藪に並んで立つたので
は、此方の袖に隠れるので、路を對方へ。別荘の袖
垣から、斜に坂の方を透かして見ると、連の浴衣は、
其の、ほの暗い小店に艶也。

「何をして居るんだらう。まをし／＼浦島さん

ぢやない、浦子さんだ。」

と破顔しつゝ、帽のふちに手をかけて、伸び上るやうにしたけれども、軒を離れさうにもせぬのであった。

「店ぐるみ總じまひにして、一箇々袋へ入れたつて、最う片が附く時分ぢやないか。」

と呟くうちに眞面目になつた、銚太郎は我ながら、「串戯ぢやない、手間が取れる。何うしたんだらう、をかしいな。」

とは思つたが、歴々彼處に、何の異状なくゝんだ
 のが見えるから、憂慮にも及ぶまい。念のために聲
 を懸けて呼ばうにも、此の眞晝間。見える處に連を
 置いて、おゝい／＼も茶番らしい、殊に婦人ではあ
 るし、と思ふ。

今にも來さうで、出向く氣もせず。火のない巻蓆
 を手にしたまゝ、同じ處にゝんで、熟と其方を。

何となく茫乎して、あゝ、家も、路も、寺も、竹
 藪を漏る蒼空ながら、地の底の世にもなりはせずや、
 連は浴衣の染色も、浅き紫陽花の花になつて、小溝
 の暗に倂のみ。我は此のまゝ石になつて、と氣の遠
 くなつた時、はつと足が出て、風が出て、婦人は軒
 を離れて出た。

小走りに急いで來る、青葉の中に寄る浪のはら／＼
 と爪尖白く、濃い黒髪の房やかな雙の鬢、浅黄の
 紐に結び果てず、海水帽を絞つて被つた、豊かな頬に

艶やかに靡いて、色の白いが薄化粧。水色縮緬の蹴
出の褌、はら／＼蓮の苔を捌いて、素足ながら清ら
かに、草履ばきの埃も立たず、急いで迎へた少年に、
ばツたりと藪の前。

「叔母さん、」

と聲をかけて、唯見るとこれが音に聞えた、然る
やうな朱の脣ものいひたさを先んじられて紅梅の花
揺ぐやう。黒目勝の清しやかに、美しくすなほな眉
の、濃きにや過ぐると煙つたのは、五日月に青柳の
影やゝ深き趣あり。浦子といふは二十七。

豪商狭島の令室で、銚太郎には叔母に當る。

此の路を去る一二三町、停車場寄の海岸に、石垣
高く松を繞らし、廊下で繋いで三棟に分けた、門に
は新築の長屋があつて、手車の車夫の控へる身上。

裳を厭ふ砂ならば路に黄金を敷きもせむ、空色の
洋服の褌を取つた姿さへ、身になかなへば唐めかで、
羽衣着たりと持て囃すを、白襟で襲衣の折から、羅
に綾の帯の時、湯上りの白粉に扱帯は何といふやら

む。此の人のためならば、此のあたりの濱の名も、狭島が浦と稱へついでう、リボン かけたる、笄したる、夏の女の多い中に、海第一と聞えた美女。

帽子の裏の日の蔭に、長いまつげの所為ならず、甥を見た目に冴がなく、顔の色も薄く曇つて、

「銚さん。」

とばかり云つた、浴衣の胸は呼吸ぜはしい。

「何うしたんです、何を買つていらしたんです、吃驚するほど長かつた。」

打見は何の仔細はなきが、物怖したらしい叔母の状を、たか／＼例の毛蟲だらう、と笑ひながら言ふ顔を、情らしく熟と見て、

「まあ、香氣らしい、早附木を取つて上げたんぢやありませんか。」

はじめて、ほつとした様子。

「頂戴！ いつかの靴以来です。恚うは叔母さんでなくツちや出来ない事です。僕も然うだらうと思

つたんです。」

「然^さうだらうぢやありませんわ。」

「ぢや、早^マ附^ツ木^チではないんですか。」

「否、銚さんが煙草を出すと、早附木がないから、打棄つて置くと、又いつものやうに、煙草には思ひ遣りがない、監督のやうだなんて言ふだらうと思つて、氣を利かして、丁ど、あの店で、」

と身を横に、踵を浮かして、恐いものゝやうに振り返つて、

「見附かつたからね、黙つて買つて上げようと思つて入つたんですがね、お庇で大變な思ひをしたんですよ。あゝ、恐かつた。」

と其まゝには足も進まず、がツかりしたやうな風情である。

「何が、叔母さん。此の日に何が恐いんです。大方又毛蟲でせう、大丈夫、毛蟲は追駈けては來ませんから。」

「毛蟲どころぢやアありません。」
と浦子は後見らるゝ状。聲も低う、

「銚さん、餘程の間だつたでせう。」

「雑ツと一時間」

半分は懸直だつたに、夫人は却つて然もありさうに、

「然うでしたかねえ、私はもつとかと思つたくら
み。何時、店を出られるだらう、と心細いつたらな
かつたよ。」

「何故、何うしたんですね、一體。」

「まあ、そろ／＼歩行きますせう。何だか氣草臥れ
でもしたやうで、頭も脚もふら／＼します。」

歩を移すのに引添うて、身體で庇ふが如くにし

つゝ、

「眞個に驚いたんですか。然ういへば、顔の色も
よくないやうですよ。」

「然うでせう、慄然として、未だに寒氣がします
もの。」

と肩を窄めて俯向いた、海水帽も前下り、頸白く
悄れて連立つ。

少年は顔を斜めに、近々と帽の中。

「まつたく色が悪い。どうも毛蟲ではないやうです
ね。」

これには答へず、やゝ石段の前を通つた。

しばらくして、

「銑さん、」

「えゝ、」

「歸途に、又此處を通るんですか。」

「通りますよ。」

「どうしても通らねば不可ませんかねえ、何處ぞ
他に路がないんでせうか。」

「海ならあります。此處い等は叔母さん、海岸の
一筋路ですから、岐路といつては背後の山へ行くよ
り他にはないんですが、」

「困りましたねえ。」

と、つく／＼云ふ。

「何ね、時刻に因つて、汐の干て居る時は、此の
別荘の前なんか、岩を飛んで渡られますがね、此節
の月ぢや何うですか、晩方干ないかも知れません。」

「船はありますか。」

「然うですね、渡船ツて別にありはしますまいけ

れど、頼んだら出して呉れないこともないでせう、さきへ行つて聞いて見ませう。」

「然うね。」

「何、叔母さんさへ信用するんなら、船だけ借りて、漕ぐことは僕にも漕げます。僕ぢや危険だといふでせう。」

「何でも可うござんすから、銑さん、貴郎、何うにかして下さい。私は最う歸途にあの店の前を通りたくないんです。」

と又俯向いたが恐々らしい。「叔母さん、まあ、

一體、何ですか。」

と、餘りの事に微笑みながら。

四

「最^もう聞^きえやしますまいね。」

と憚^{はげ}る所^{ところ}あるらしく、聲^{こゑ}も此^この時^{とき}なは低^{ひく}い。

「何^{なに}が、何處^{どこ}で、叔母^{おば}さん。」

「彼處^{あそこ}まで、」

「あゝ！ 汚店^{きたなみせ}へ、」

「大きな聲^{こゑ}をなさんなよ。」 と吃驚^{びっくり}したやうに

慌^{あわた}しく、瞳^{ひとみ}を据^すゑて、密^{そつ}といふ。

「何^{なに}が聞^きえるもんですか。」

「ぢやあね、言^いひますけれど、銑^{せん}さん、私^{わたし}がね、

今^{いま}、早附^{マツチ}木^かを買^かひに入^{はい}ると、誰^{だれ}も居^あないのよ。」

「へい？」

「下^{くだ}さいな、下^{くだ}さいなツて、然^さういふとね。穴^{あな}が

開^あいて、こはれ／＼で、鼠^{ねずみ}の家^{いえ}の三階^{がいで}建^たのやうな、

取附^{とつゝき}の三段^{だん}の古棚^{ふるたな}の背^{うしろ}のね、物置^{ものおき}見^みたいな暗^{くら}い中^{なか}か

ら、――藻屑^{もくづ}を曳^ひいたかと思^{おも}ふ、汚^{きたな}い服^な装^りの、

小^{ちひ}さな婆^{ばあ}さんがね、よぼ／＼と出^でて來^きたんです。

髪^{かみ}の毛^けが眞白^{まっしろ}でね、彼^{かれ}是^{これ}八十^{はち}にもならうかと云^いふ

んだけれど、其^その割^{わり}には皺^{しわ}がないの、顔^{かほ}

に。身體は瘦せて骨ばかり、而してね、骨が、くな／＼と柔かさうに腰を曲げてさ。

天窓でもものを見るてツたやうに、白髪を振つて、ふツ／＼と息をして、脊の低いのが、然うやつて、胸を折つたから、其處らを這ふやうにして店へ來るぢやありませんか。

早附木を下さいなツて、云つたけれど聞えませぬ。尤もね、はじめから聞えないのは覺悟だといふやうに、顔を上げてね、人の顔を視めてさ。目で承りませうと言ふんぢやないの。

お婆さん、早附木を下さい、早附木を、といった、私の脣の動くのを、熟と視めて居たツけがね。

其の顔を上げて居るのが大儀さうに、又がツくり俯向くと、白髪の中から耳の上へ、長く、干からびた腕を出したんですがね、掌が大きいの。

それをね、けだるさうに、ふら／＼とふつて、片々

の人指ゆびで、恚うね、左の耳を教へるでせう。

聞えないと云ふのかね、そんなら可うござんす。

私は何だか一目見ると、厭な心持がしたんですからね、買はずと可いから、其のまゝ店を出ようと思ふと、又然う行かなくなりましたわ。

弱るぢやありませんか、婆さんがね、けだるさうに膝を伸ばして、耳を、私の顔の傍へ横向けに差しつけたんです。

ふんと臭つたの。何とも言へない、きなツくさいやうな、醤油の焦げるやうな、厭な臭よ。」

「呀、そりや困りましたね。」

と、是を聞いて少年も顰んだのである。

「早附木を下さい。」

（はあ？）

（早附木よ、お婆さん。）

（はあ？）

はあッて言ふ切なの。目を眠つて、口を開けてさ、

臭におふでせう。

（早マツチ附木、）ツて私わたしは、眞ま個たくよ。銑せんさん、泣なきた
くなつたの。

たゞ最もう遁にげ出だしたくツてね、其そこ處いら等みまニすけれど、
貴あなた下すがたの姿すがたも見すがたえなかつたんですもの。

はあ、長ながい間あひたよ。

それでもやう／＼聞きえたと見みえてね、口くちをむぐ／
＼とさして合がつて点ん々とをしたから、また手て間まを取とらな
いやうにと、直すぐにね、銅どう貨くわを一ひとつ渡わたして遣やると、
しばらくして、早マツチ附木いちを一いちダース。

そんなには要いらないから、包つみを破やぶいて、自じ分ぶんで一
つだけ取とつて、あゝ、厄やく落おとし、と出でようとすると、
緊しつかりこ乎こ此この、

と片かた手たてを下したに、袖そでをかさねた袂たもとを揺ゆつたが、氣き味みわ
悪わるさうに、胸むねをかはして密そつと拂はらひ、

「袂たもとをつかまへたのに、引ひ張っぱられて動うごけないぢや
ありませんか。」

「かさね／＼、成なる程ほど、はあ、それから、」

五

「私わたしや、銚せんさん、何どうしようかと思おもつたんです。

何なんにも云いはないで、ぐん／＼引張ひっぱつて、かぶりを掉ふるから、大方おほかた、剩錢つりを寄越よこさうといふんでせうと思おもつて、留とまりますとね。

漸やっと安心あんしんしたやうに手てを放はなして、それから向むかう向むきになつて、縷さしから穴あなのあいたのを一ひとつ一ひとつ。

それが又またしばらくなの。

私わたしの手わたしてを引張ひっぱるやうにして、掌てのひらへ呉くれました。

ひやりとしたけれど、そればかりなら可よかつたのに。

（御新姐様しんぞさまや）

と浦子うらこの聲こゑ、異様いやうに震ふるへて聞きこえたので、

「え、其その婆ばが、」

「あれ、銚せんさん、聞きこえますよ。」と、一歩あしいそ

がはしく、ぴつたり寄添よりそふ。

「其の婆か、云つたんですか。」

夫人は又吐息をついた。

「婆さんがね、あゝ。」

（御新姐様や、御身ア、すいたらしい人ぢやでの、安く、なかまの値で進ぜるぞい。） ツて、皺枯れた聲で然う云ふとね、ぶんと頭へ響いたんです。

而して、すいたらしいツてね、私の手首を熟と握つて、眞黄色な、平たい、小さな顔を振上げて、じろ／＼と見詰めたの、

其の握つた手の冷たい事ツたら、まるで氷のやうぢやありませんか。而して目がね、黄金目なんです。

光つたわ！

貴郎。

キラ／＼と、其の凄かつた事。」

とばかりで重さうな頭を上げて、俄かに黒雲や起ると思ふ、憂慮はしげに仰いで視めた。空ざまにも恍惚、紐を結へた頃の震ふが見えたり。

「心持でせう。」

「否、じろりと見られた時は、其の目の光で私の顔が黄色になつたかと思ふくらゐでしたよ。灯に近いと、赤くほてるやうな氣がするのと同じに。」

「最う私、二條針を刺されたやうに、背中の兩方から慄然として、足もふら／＼になりました。」

「夢中で二三間駈け出すとね、ちやらんと音がしたので、又ハツと思ひましたよ。お錢を落したのが先方へ聞えやしまいかと思つて。」

「何でも一大事のやうに返した剩錢なんですもの、落したのを知つては追つかけて來かねやしません。銚さん、まあ、何てこつてせう、どうした婆さんでせうねえ。」

「されば叔母上の宣ふ如し。年紀七十あまりの、髪の眞白な、顔の額い、年紀の割に皺の少い、色の黄な、耳の遠い、身體の臭ふ、骨の軟かさうな、舉動のくなく／＼した、なほ其の言に従へば、金色に目の光る嫗とより、銚太郎は他に答ふる術を知らなかつた。」

但其の、早附木一つ買ひ取るのに、半時ばかり経
つた仔細が知れて、疑はさらりとなくなつたばかり
であるから、氣の毒らしい、と自分で思ふほど一向
な暢氣。

「早附木は？ 叔母さん。」と魅せられたものゝ
背中を一つ、トンと打つやうなのを唐突に言つた。

「あゝ、然うでした。」

と心付くと、これを嫗に握られた、買物を持つた
右の手は、未だ左の袂の下に包んだまゝで、撫肩の
桁をなぞへに、浴衣の筋も水に濡れたかと、ひた／
＼としをれて、片袖しるく、悚然としたのが其まゝ
である。大事なことを見るが如く、密とはづすと、
銚太郎も覗くやうに目を注いだ。

「おや！」

黒の唐繻子と、薄鼠に納戸がゝつた絹ちゞみに寶
づくしの絞の入つた、腹合せの帯を漏れた、水紅色
の扱帯にのせて、美しき手は芙蓉の花片、風もさそ
はず無事であつたが、キラリと輝いた指環の他に、
早附木らしいものゝ形も無い。

視詰めて、夫人は、

「 ものも得いはぬのである。」

「 あゝ、剩銭と一緒に遺失したんだ。叔母さん何
の邊？」

と氣早に向き返つて行かうとする。

「 お待ちなさいよ。」

と遮つて上げた手の、仔細なく動いたのを、嬉し

さうに、少年の肩にかけて、見直して呼吸をついて、

「 銚さん、お止しなさいノ、氣味が悪いから、

ね、お止しなさい。」

と然も一生懸命。壓へぬばかりに引留めて、

「 あんなものは、今頃に化つて居るか分りませ

んよ、よう、ですから、銚さん。」

「 ぢや止します、止しますがね。」

少年は餘りの事に、

「はゝゝはゝ、何だか妖物でゞもあるやうだ。」

と半ば呟いて、又笑つた。

「私は妖物としか考へないの、まさか居ようとは思はれないけれど。」

「妖物ですとも、妖物ですがね、其のくなくした處や、天窓で歩行きさうにする處から、黄色く黴つた處なんぞ、何の事はない婆の毛蟲だ。毛蟲の婆さんです。」

「厭ですことねえ。」と身ぶるひする。

「何もそんなに、氣味を悪がるには當らないぢやありませんか。其の婆に手を握られたのと、もしか、樹の上から、」

と上を見る。藪は盡きて高い石垣、榎が空にかぶさつて、浴衣に薄き日の光、二人は月夜を行く姿。

「ぽたりと落ちて、毛蟲が頸すぢへ入つたとする
と、叔母さん、どつちが厭な心持だと思ひます。」

「澤山よ、銚さん、私は最う、」

「否、まあ、どつちが氣味が悪いんですね。」

「そりや、だつて、然うねえ、どつちがどつちとも言へませんね。」

「そら御覽なさい。」

説き得て可しと思へる状して、

「叔母さんは、其の婆を、妖物か何ぞのやうに大騒ぎを遣るけれど、氣味の悪い、厭な感じ。」

感じ、と聲に力を入れて、

「感じといふと、何だか先生の假聲のやうです

ね。」

「氣樂なことをおつしやいよ！」

「だつて、然うぢやありませんか、其の氣味の悪い、厭な感じ、」

「でも先生は、工合の可いとか、妙なとか、おもしろい感じツて事は、お言ひなさるけれど、氣味の悪いだの、厭な感じだのツて、そんな事は、めつたにお言ひなさることはありません。」

「しかしですね、詰らない婆を見て、震へるほど恐がつた、叔母さんの風ツたら
工合の可い、妙な、おもしろい感じがする、と言つたら、叔

母さんは怒るでせう。」

「當然ですわ、貴郎。」

「だから此場合ですもの。失張厭な感じた。其の
氣味の悪い感じといふのが、毛蟲とおなじくらゐだ
と思つたら何うです。別に不思議なことは無いぢや
ありませんか。毛蟲は氣味が悪い、けれども怪いも
のでも何でもない。」

「然う言へば然うですけれど、だつて婆さんの、
其の目が、ねえ。」

「毛蟲にだつて、睨まれて御覽なさい。」

「もじや／＼と白髪が、貴郎。」

「毛蟲といふくらゐです、もじや／＼處なもんで
すか、澤山毛がある。」

「まあ、貴方の言ふことは、蝸牛の狂言のやうだ
よ。」

「と寂しく笑つたが、」

「あれ、」

「寺でカン／＼と鐘を鳴らした。」

「あゝ、此の路の長かつたこと。」

釣棹を、ト肩にかけた、處士あり。年紀のころ三十四五。五分刈のなだらかなるが、小鬢さきへ少し兀げた、額の廣い。目のやさしい、眉の太い、引緊つた口の、やゝ大きいのも凜々しいが、頬肉が厚く、小鼻に笑ましげな皺深く、下頤から耳の根へ、べたりと鬚のあとの黒いのも柔和である。白地に藍の縦縞の、縮の襦衣を着て、襟のこはぜも見えさうに、衣紋を寛く紺駢、二三度水へ入つたらう、色は薄く地も透いたが、糊澤山の折目高。

薩摩下駄の小倉の緒、太いしつかりしたおやゆびで、螻を拵へねばならぬほど、弛いばかりに歪んだのは、水に對して石の上に、是を臺にして居たのであつた。

時に、釣れましたか、獲物を入れて、片手に提ぐべき畚は、十八九の少年の、洋服を着たのが、代りに持つて、連立つて、海からそよ／＼と吹く風に、山へ、さら／＼と、蘆の葉の青く揃つて、二尺ばかり

り靡く方へ、岸づたひに夕日を背。峰を離れて、一刷の薄雪を出て玉の如き、月に向つて歸途、ぶらり／＼と一云ふことは、此の人よりぞはじまりける。

「賢君、君の山越えの企ては、大層歸りが早かつたですな。」

少年は莞爾やかに、

「それでも一抱へほど山百合を折つて來ました。歸つて御覽なさい。そりや綺麗です。母の部屋へも、先生の床の間へも、丁と活けるやうに言つて來ました。」

「はあ、それは難有い。朝なんざ崖に湧く雲の中にちら／＼燃えるやうなのが見えて、もみぢに朝霧がかゝつたと云ふ工夫で居て、何となく高蜂の花といふ感じがしたのに、賢君の丹精で、机の上に活かつたのは感謝する。」

早く行つて拝見しよう、
が、また誰か、
臺所の方で、私の歸るのを待つて居るものはなかつたですか。」

と小鼻の左右の線を深く、微笑を含んで少年を。

顔を見合はせて此方も笑ひ、

「はゝゝゝ、松が大層待つて居ました。先生のお肴を頂かうと思つて、お午飯も控へたつて言つて居ましたつけ。」

「それだ。なか／＼人が悪い。」 廣い額に手を

加へる。

「それに、母も、先生。お土産を楽しみにして、お腹をすかして歸るからつて、言づけをしたさうです。」

「益々恐縮。はあ、で、奥さんは何處かへお出か

けで。」

「銚さんが一緒ださうです。」

「然うすると、其の連の人も、同じく土産を待つ方なんだ。」

「勿論です。今日ばかりは途中で叔母さんに何にも強請らない。犬川で歸つて来て、先生の御馳走になるんですつて。」

と又顔を見る。

此の時、先生愕然として頸をすくめた。

「あかぬ！ 包圍攻撃ぢや、恐るべきだね。就中、
銃太郎などは、自分釣棹をねだつて、貴方が何です、
と一言の下に叔母御に拒絶された怨があるから、其
の祟り容易ならずと可知矣。」

と蘆の葉ずれに棹を垂れて、思はず觀念の眼を塞
げば、少年は氣の毒さうに、

「先生、買つて行らつしやい。」

「買ふ？」

「だつて一尾も居ないんですもの。」

と今更ながら畚を覗くと、冷い磯の香がして、ざ
ら／＼と隅に固まるものあり、方丈記に曰く、がう
なは小さき貝を好む。

先生は見ざる眞似して、少年が手に傾けた件の畚を横目に、

「生憎、沙魚、海津、小鮒などを商ふ魚屋がなくつて困る。奥さんは何も知らず、銚太郎なほ欺くべしぢやが、あの、お松といふのが、又悪く下情に通じて居つて、がうなや川蝦で、鱒やおぼこの釣れないことは心得て居るから。これで魚屋へ寄るのは、落語の権助が川狩の土産に、過つて蒲鉾と目刺を買つたより一層の愚ぢや。」

特に餌の中でも、御馳走の川蝦は、あの松がしんせつに、其處らで掬つて来て呉れたんで、其をちぎつて釣る時分は、浮木が水面に届くか届かぬに、ちよろり、かいづ奴が攫つて了ふ。

大切な蝦五つ、瞬く間にして遣られて、がうなに成ると、絲も動かさないなどは、誠に恥入るです。

私は賢君が知つとる通り、唯釣といふ事におもしろい感じを持つて行るのぢやで、釣れようが釣れま

いが、トンとそんな事に頓着はない。

次第に因つたら、針もつけず、餌なしに試みて可
いのぢやけれど、其れでは餘り賢人めかすやうで、
氣咎がするから、成るべく餌も附着けて釣る。獲物
の有無でおもしろ味に變はないで、又此の空畚をぶ
らさげて、蘆の中を釣棹を擔いだ處も、工合の可い
感じがするのぢやがね。

其の様子では、諸君に對して、とても此のまゝ、
棹を掉つては歸られん。

釣を試みたいと云ふと、奥様が過分な道具を調へ
て下すつた。此の七本竹の繼棹なんぞ、私には勿體
ないと思つたが、恚う云ふ時は役に立つ。

一つ疊み込んで懷中へ入れるとしよう、賢君、一
寸其處へ休まうではないか。

と月を見てて立停つた、山の裾に小川を控へて、
蘆が吐き出した茶店が一軒。薄い煙に包まれて、茶
は沸いて居さうだけれど、葦簣張がぼんやりして、
恚る天氣に、何事ぞ、雨露に朽ちたりな。

「可いぢやありませんか、先生、畚は僕が持つて居ますから、松なんぞ愚圖々々言つたら、ぶツつけて遣ります。」

無二の味方で頼母しく慰めた。

「いや又、恚う辟易して、棹を畳んで、懷中へ了ひ込んで、煙管筒を忘れた、といふ顔で歸る處もおもしろい感じがするで。」

それに咽喉も乾いた、茶を一つ飲みませう。先づ休んで、

と三足ばかり、路を横へ、茶店の前の、一間ばかり蘆が左右へ分れて居た、根が白く濡地か透いて見えて、ぶく／＼と蟹の穴、うたかたのあはれを吹いて、茜がさして、日は未だ高いが蟲の聲、艫を漕ぐやうに、ギイ、ギツ、チヨツ、チヨ。

「さあ、お掛け。」

と少年を、自分の床几の傍に居らせて、先生は乾くと云つた、其の脣を撫でながら、

「茶を一つ下さらんか。」

暗い中から白い服装、麻の葉いろの巻つけ帯で、
草履の音、ひたーひた、と客を見て早や用意
をしたか、蟋蟀の囁つた塗盆に、朝顔茶碗の龜裂だ
らけ、茶漉おで錆びたのを二つのせて、

「あがりまし、」

と据ゑて出し、腰を屈めた嫗を見よ。一筋ごとに
美しく櫛の齒を入れたやうに、毛筋が透つて、生際
の揃つた、柔かな、茶にやゝ褐を帯びた髪の色。黒
き毛、白髪しらがの塵ばかりをも交へぬを、切髪きりがみにプツリ
と下げた、色の白い、艶のある、細面の頤尖つて、
鼻筋の衝と通つた、何處かに氣高い處のある、年紀
は誰が目も同一である。

「渺々乎として、蘆ぢや。お婆さん、好景色だね。二三度来て見た處ぢやけれど、此店の工合が可い所爲か、今日は格別に廣く感じる。」

此の海の他に、又こんな海があらうとは思へんくらゐぢや。」

と頷くやうに茶を一口。茶碗にかゝるほど、襯衣の袖の膨らかなので、搔抱く體に茶碗を持つて、少年はうしろ向に、山を視めて、おつきあひといふ顔色。先生の影二尺を隔てず、窮屈さうに唯もぢ／＼。

嫗は威儀正しく、膝のあたりまで手を垂れて、
「はい、申されます通り、世がまだ開けませぬ泥沼の時のやうな蘆原でござるわや。」

此の川沿は、何處も彼處も、蘆が生えてあるなれど、私が小家のまはりには、また多う茂つてござる。

秋にもなつて見やしやりませ。丈が高う、穂が伸びて、小屋は屋根に包まれる、山の懷も隠れるけに、

月も葉の中から出さゝれて、蟹が莖へ上つての、岡
沙魚といふものが根の處で跳ねるわや、漕いで入
船の櫓の音も、水の底に陰氣に聞えて、寂しくな
るがの。其の時稻が實るでござつて、お日和ぢや、
今年、作も豊年さうにござります。

最う、こなやうに老い朽ちて、あとを頂く御菩薩
の粒も、五つ七つと、算へるやうになつたれども、
生あるものは淺間しうての、蘆の茂るを見るにつけ
ても、稻の太るが嬉しうてなりませぬ、はい、は
い。

と細いが聞くものゝ耳に響く、透る聲で言ひなが
ら、何處を何うしたら笑へよう、辛き浮世の汐風に、
冷く大理石になつたやうな、其の佛造つた顔に、寂
しげに莞爾笑つた。鐵漿を含んだ齒が揃つて、貝の
やうに美しい。それと尚目についたは、顔の色は白
いのに、其の眠つたやうな織い目の、紅の絲、と見
るばかり、赤く線を引いて居たのである。

「成程、はあ、いかにも、」
と言つたばかり、嫗の言は、此の景に對するもの

をして、約半時の間、未來の秋を想像せしむるに餘りあつて、先生は手なる茶碗を下にも措かず、少時蘆を見て、やがて其の穂の人の丈よりも高かるべきを思ひ、白泡のつぶ／＼と、濡土に呷く蟹の、やがてさら／＼と穂に攀ぢて、鉢に月を招くやなど、茫然として視めたのであつた。

蘆の中に路があつて、さら／＼と葉ずれの音、葦簣の外へ又一人、黒い衣の嫗が出て來た。

茶色の帯を前結び、肩の幅廣く、身もやゝ肥えて、髪は未だ黒かつたが、薄さは條を揃へたばかり。生際が抜け上つて頭の半ばから引詰めた、ぼんのかどにて小さなおばこに、櫛の形の笄さした、片頬瘦せて、片頬肥く、目も鼻も口も頤も、いびつ形に曲んだが、肩も横に、胸も横に、腰骨のあたりも横に、だるさうに手を組んだ、これで釣合ひを取るのであらう。唯其のまゝでは根から崩れて、海の方へ横倒れに成らねばならぬ。

肩と首とで、うそ／＼と、斜めに小屋を差覗いて、

「ござるかいの、お婆さん。」

と、片頬夕日に眩しさう、ふくれた片頬は色の悪
さ、蒼ざめて藍のやう、銀色のどろりとした目、瞬
をしながら呼んだ。

駄菓子子の箱を並べた臺の、陰に入つて踞んで居た、
此方の嫗が顔を出して、

「主か。やれも／＼、お達者でござるわや。」
と、ぬいと起つと、其の紅絲の目が動く。

来たのが口もあけず、咽喉でものを云ふやうに、
顔も静と傾いたるまゝ、

「主もそくさいでめでたいぞいの。」

「お天氣模様でござるわや。暑さには喘ぎ、寒さには悩み、なう、時候よければ蛙のやうに、くらしの蛇に追はれるに、此の年になるまでも、甘露の日和と聞くけれども、甘い露は飲まぬわよ、ほゝほ、」

と薄笑ひした、又齒が黒い。

「おいの、然ればいの、お互に砂の数はど苦しみ
のたねは盡きぬ事いの。やれも／＼、」と言ひな
がら、斜めに立つた廂の下、何を覗くか爪立つが如
くにして、然も肩腰は造りつけたものゝやう、動か
ざること如朽木。

「若い衆の愚振より年よりの愚痴ぢや、聞く人も煩さかる、措かつしやれ、ほゝほ。なう、お姿さん。主はさて何處へ何を志して出てござった、山かいの、川かいの。」

「いにやの、恐しう齒がうづいて、きり／＼鑿で抉るやうぢや、と苦しむ者があるによつて、私がまじなうて進ぜうと、濱へ■の針掘りに出たらばよ、獵師どもの風説を聞かつしやれ。志す人があつて、此の川ぞひの三股へ、石地藏が建つと云ふわいの。」

それを聞いて、フト振向いた少年の顔を、ぎろりと、其の銀色の目で流眇にかけたが、取つて十八の學生は、何事も考へなかつた。

「や、風説きかぬでもなかつたが、其はまことでござるかいの。」

「おいの／＼、こんな難有い奇特なことを、うつかり聞いてござる年紀ではあるまいがや、やゝ、お姿さん。」

主は氣が長いで、大方何ぢやらうぞいの、地藏様開眼が済んでから、杖を突張つて参らしゃます心ぢ

やるが、お互に年紀ぢやぞや。今の時世に、またじふない結縁ぢやに因つて、半日も早うなう、其の難有い人のお姿拝まうと思つての、やらやつと重たい腰を引立て出て来たことよ。」

紅絲の目は又揺れて、

「奇特にござるわや。さて、其の難有い人は誰でござる。」

「はて、それを知らしやらぬ。主としたものは何といふことぞいの。此さきの濱際に、然るの、大長者どの、お別荘がござるてよ。其の長者の奥様ぢやわいの。」

「それが御建立なされるかよ。」

「おいの、いんにやいの、建てさつしやるは其の奥様に違ひないが、發願した篤志の方は又別にあるといの。」

聞かつしやれ。

其の奥様は、世にも珍らしい、三十二相そろはしつた美しい方ぢやとの、膚があたゝかぢやに因つて人間よ、冷たければ天女ぢや、と皆いふのぢやがの、

其の長者どのの後妻ぢや、うはなりで居さつしやる。

よつて其の長者どのとは、三十も上も年紀が違つて、男の兒が一人ござつて、それが今年十八ぢや。

奥様は、それ、継母いの。

氣立のやさしい、膚も心も美しい人ぢやによつて、
繼母繼兒と言ふやうなものではなけれども、なさぬ
なかの事なれば、寓に一つも過失のないやうに、と
其の一十四の春ごろから、行の正しい、學のある先
生様を、内へ頼みきりにして傍へつけて置かしやつ
た。

二人は正にそれなのである。

「よいかの、十四の年から此の年まで、四五六七八と五年の間、寝るにも起るにも附添うて、しんせつにお教へなすつた、其の先生様のたんせいと云ふものは、一通の事ではなかつたとの。

其の効があつて此の夏はの、其のお子が然る立派な學校へ入らつしやるやうになつたに就いて、先生様は邸を出て、自分の身體になりたいたいといはつしやる。

それまで受けた恩があれば、お客分にして一生置き申さうと云ふことなれど、宗旨々々のお祖師様でも、行きたい處へ行かつしやる。無理やりに留めますことも出来んでなう。」

「ほんにの、お姿さん。」

「今度いよ／＼長者どの、邸を出さつしやるに就いて、長い間御恩になつた、其お禮心といふのぢやよ。何ぞ早や、しるしに残るものを、と云うて、黄金か、珠玉か、と尋ねさつしやるとの。

其の先生様、地藏尊の一體建立して欲しいと言は

されたとよ。

然う云へば何となく、顔容も柔和での、石の地藏
専に似てござるお人ぢやさうなげな。」

先生は面を背けて、笑を含んで、思はず其の口の
あたりを擦つたのである。

「それは奇特ぢや、小兒衆の世話を願ふに、地藏
様に似さしつた人は、結構にござることよ。」

「然れば其の事よ。未だ四十にもならつしやらぬ
が、慾も徳も悟つたお方ぢや。何事があつても莞
爾々々とさつせて、つひぞ、腹立たしつたり、悲
しがらしつた事はないけに、何として其のやうに難
有い氣になられたぞ、と尋ねるものがあるわいの。

先生様が言はつしやるには、傳もない、教もない。
私はどうした結縁か、其の顔色から容子から、野中
に茫乎立たしましたお姿なり、心から地藏様が氣に
入つて、明暮、地藏、地藏と念ずる。

痛い時、辛い時、口惜い時、怨めしい時、情ない

時と、事どもが、まあ、あつてもよ。待てな、待てな、さて恚うした時に、地藏菩薩なら何となさる、と考へれば胸も開いて、氣が安らかになることぢや、と申されたげな。お姿さん、何と奇特な事ではないかの。」

「御奇特でござるなう。」

「ぢやでの、何の心願と云ふでもないが、何かしるしをといはるゝで思ひついた、お地藏一體建立をといはつしやる。」

折から夏休みにの、お邸中が濱の別荘へ来てぢやに就いて、其の先生様も見えられたが、此の川添の小橋の際のゝ、蘆の中へ立てさつしやる事になつて、今日はや奥さまがの、此の切通しの崖を越えて、二つ目の濱の石屋が方へ行かれたげぢや。

なう、先生様は先生様、また難有いお方として、淨財を喜捨なされます、其の奥様の事いの。

少い身そらに、御奇特な、たとひ御自分の心からではないとして、其の先生様の思召に嬉し喜んで従

はせえましたのが、はや菩薩の御弟子でましますぞいの。

七歳の龍女とやらぢや。

結縁せう。年をとると氣忙しうて、片時も恚うしては居られぬわいの、はやく其の美しいお姿を拝まうと思つての。それで、はい、お婆さん、えツちら／＼出て來たのぢや。」

「おう、されば、これから二つ目へおざるかや。」
「然ればいの、行くわいの。」

「ござれ／＼。私も店をかたづけたら、路ばたへ出て、其の奥様の、歸らしやますお顔を拝まうぞいの。」

赤目の姫は自から深く打額いた。

時に色の青い銀の目の嫗は、對手の頤につれて、
 片がりながら、さそはれたやうに頷いたが、肩を曲
 げたなり手を腰に組んだまゝ、足をやゝ横ざまに左
 へ向けた。

「歸途のほどは宵月ぢや、ちらりとしたらお姿を
 見はづすまいぞや。かぶりものゝ中、氣をつけさつ
 しやれ。お方くらゐ、美しい、紅のついた脣は少な
 いとの。薄化粧に變りはなうても、膚の白いが其の
 人ぢや、濱方ぢやで紛れはないその、可いか、お姿
 さん、そんなら私は行くわいの。」

「茶一つ參らぬか、まあ可いで。」

「預けましょ。」

「これは粗末なや。」

「お雑作でござりました。」

と齊しく前へ傾きながら、腰に手を据ゑて、てく
 ノゝと片足づゝ、右を左へ、左を右へ、一ツづゝ踏
 んで五足六足。

「あゝ、これな、これな。」

と、廂ひさしの夕日ゆふひに手てを上げて、たそがれかゝる姿すがたを呼よべば、蘆あしを裾すそなる背影うしろかげ。

「おい、」

とのみ、見みも返かへらず、八や夕ゆふと留とまつて、打傾うちかたむいた、耳みみを其そのまゝ言ことばを待まつ。

「主ぬし、今いまのことをの、坂下さかしたの姉あねさまにも知しらして遣やらしやれ、さだめし、あの兒こも拝をがみたかる。」

聞ききつけて、件くだんの嫗おつな、ぶる／＼と頭かぶりを掉ふつた。

「むんにやよ、年とし紀しが上うへだけに、姉あねさまは後生ごしやうのことは抜ぬからぬぞの。八丈ちやうヶ島しまに鐘かねが鳴なつても、うとい耳みみに聞きく人ひとぢや。それに二ふたつ目めへ行ゆかつしやるに、奥様おくさまは通とほり路みち。最もう先刻さつきに拝をがんだぢやるが、念ねんのためぢや立寄たちよりましたよ。あゝ、それよりかお姿ばあさん、

と片頬かたほを青あをく捻ねぢ向むけた、鼻筋はなすぢに一つひとつの目めが、じろりと此方こなたを見みて光ひかつた。

「主ぬし、數珠じゆずを忘わすれまいぞ。」

「おう、可いとももの、お姿さん、主、其の二の針を落さつしやるな。」

「御念には及ばぬわいの。はい、」

と言つて、それなり前途へ、蘆を分ければ、廂を離れて、一人は店を引込んだ。磯の風一時、行くものを送つて吹いて、楓と返つて、小屋をめぐつて、ざわ／＼と鳴つて、寂然した。

ゆ。
吻々吻と花やかな、笑ひ聲、濱のあたりに遙に聞

時に一碗の茶を未だ飲干さなかつた、先生はツト心着いて、いぶかしげな目で、先づ、傍なる少年の並んで坐つた背を見て、又四邊を二したが、月夜の夕日に返つたやうな思ひがした。

渠の言が嫗を魅したか、其の蘆の葉が伸びて、山の腰を蔽ふ時、水底を船が漕いで、岡沙魚といふもの土に跳ね、豆蟹の穂末に月を見る状を、目のあたり目に浮べて、秋の夜の月の趣に、いつか心の取られた耳へ、蘆の根の泡立つ音、葉末を風の戦ぐ聲、

あたか あめつち つぶや さくや
恰も天地の吹き囃くが如く、我が身の上を語るのを、
たゞゆめ
唯夢のやうに聞きながら、顔の地藏に似たなどは、
をかしと現にも思つたが、何時ごろ、どの時分、も
う一人の姫が来て、何時其の姿が見えなくなつたか、
さだかには覚えなかつた。譬へば、そよ／＼と吹く風
の、何時来て、何時歇んだかを覚えぬが如く、夕日
の色の、何の機に我が袖を、山陰へ外れたかを語ら
ぬ如く。

されば其の間、凡そ、時のいかばかりを過ぎたか
を辨へず、月夜とばかり思つたのも、明るく晴れた
今日である。いつの程にか、繼棹も少年の手に畳ま
れて、袋に入つて、紐まで丁と結へてあつた。

聲をかけて見ようと思ふ、姫は小屋で暗いから、
他の一人は其處へと見遣るに、誰も無し、月を肩な
る、山の裾、蘆を茵の寝姿のみ。

「賢、」

と呼んだ、我ながら雉子のやうに聞えたので、咳
して、もう一度、

「賢君、」

「はい」

と快活に返事する。

「今の婆さんは幾歳ぐらゐに見えました。」

「此の茶店のですか。」

「いや、もう一人、」

此處へ來た年寄が

居たでせう。」

「否。」

「あれえ！ あゝ、あ、あゝ
 恐こはかつた、陶むねが躍をどつて、壓おさへた乳房ちぶさあも重おもいやう、忌いま
 はしい夢ゆめから覺さめた。―― 浦子うらこは、獨ひとり蚊帳かやの
 裏うら。身みの戦をのゝくのが未まだ留やまねば、腕うでを相違くみちがへに緊しつか乎
 と兩りやうの肩かたを抱だいた、腋わきの下したから脈みやくを打うつて、垂たらと冷つめた
 い汗あせ。

さても其その夜よは暑あつかりしや、夢ゆめの恐おそれ怖これに悶もたえしや、
 紅もみづら裏らの絹きぬの搔かき卷まき、鳩尾みづおちをい迂すべり退のいて、寢衣ねまきの衣紋えもんく
 崩つれたる、雪ゆきの膚はだへに蚊帳かやの色いろ、殘燈ありあけの灯ひに青あをく染そま
 つて、枕まくらに亂みだれた鬢びんの毛けも、寢汗ねあせにしと濡ぬれたれ
 ば、襟白粉えりおしろいも水みづの薰かをり、身みはたゞ、今いましも藻屑もくづの中なかを
 浮うかび出いでたかの思おもひがする。

まだ身體からだがふら／＼して、床とこの途とちう中ちゆうにあるやうな。

これは寝た時に今も變らぬ、別に怪しい事ではない。
二つ目の濱の石屋が方へ、暮方佛像をあつらへに往
つた歸りを、厭な、不気味な、忌はしい、婆のあら
もの屋の前が通りたくなさに、丁ど満潮で漕げたか
ら、梅松の流れる岩の上を、船で歸つて来た所爲で
あらう。艫を漕いだのは銑さんであつた、夢を漕い
だのも失張銑さん。

其の時は折悪く、釣船も遊山船も出拂つて、船頭
たちも、漁、地曳で急がしいから、と石屋の親方が
濱へ出て、小船を一艘借りて呉れて、岸を漕いでお
いでなさい、山から風が吹けば、疊を歩行くより確
なもの、船をひつくりかへさうたつて、海が合點す
るものではねえと、大丈夫に承合ふし、銑太郎もな
か／＼素人離れがして居る由、人の風説も聞いて居
るから、安心して乗つて出た。

岩の間をすら／＼と縫つて、銑さんが船を持つて
来て呉れる間、私は銀の粉を裏ごしにかけ
たやうな美しい砂地に立つて、足許まで藍の繪具を
溶いたやうに、ひた／＼軽く寄せて来る、浪に心は

置かなかつたが、又然うでもない。先刻の荒物屋が背後へ来て、あの、また變な聲で、御新姐様や、といひはしまいかと、大抵氣を揉んだ事ではない。

婆さんは幾らも居る、本宅のお針も婆さんなら、自分に伯母が一人、それも婆さん。第一近い處が、今内に居る、松やの阿母だといつて、此の間鄰村から尋ねて来た、それも年より。何故あんなに恐ろしかつたか、自分にも分らぬくらゐ。

毛蟲は怪しいものではないが、一目見ても総毛立つ。おなじ事で、たとひ不氣味だからと云つて、些とも怪しいものではないと、銚さんはいふけれど、あの、黄金色の目、黄な顔、這ふやうに歩いた工合。あゝ、思ひ出しても悚然とする。

夫人は搔卷の裾に障つて、爪尖から又悚然とした。

けれども其の時、濱邊に一人立つて居て、何だか怪しいものなぞは世にあるものとは思へないやうな、

氣丈夫な考へのしたのは、自分がイんで居た七八間
さきの、切立てに二丈ばかり、沖から燃ゆるやうな
紅の日影もさせば、一面には山の緑が月に映つて、
練絹を裂くやうな、柔な白浪が、根を一まはり結ん
ぢや解けて擴がる、大きな高い巖の上に、水色のと、
白衣のと、水紅色のと、西洋の婦人が三人。！

白衣のが一番上に、水色の其の肩が、水紅色のよ
り少し高く、一段下に二人並んで、指を組んだり、
裳を投げたり、胸を軽くそらしたり、時々楽しさう
に笑つたり、話聲は聞えなかつたが、然ものんきら
しく、おもしろさうに遊んで居る。

それを又其の人々の飼犬らしい、毛色のいゝ、臘
虎のやうな茶色の洋犬の、口の長い、耳の大きなの
が、浪際を放れて、巖の根に控へて見て居た。

まあ、こんな人たちもあるに、あの婆さんを妖物
か何ぞのやうに、恚うまで恐がるのも、と恥かしく
もあれば、又そんな人たちが居る世の中に、と頼母
しく。

と、
浦子^{うぶこ}は蚊帳^{かや}に震^{ふる}へながら思^{おも}ひ續^{つゞ}けた。

十四

ざんぶと次に黒く飛んで、螺線を描く白い水脚、泳ぎ出したのは其の洋犬で。

来るのは何ものだか、見届けるつもりであつたらう。

長い犬の鼻づらが、水を出て浮いたむかうへ、銚さんが艀をおしておいでだつた。

うしろの小松原の中から、のそ／＼と人が來たのに、ぎよつとしたが、それは石屋の親方で。

草履ばきでも濡れさせまいと、船がそこつた間だけ、負つて呉れて、乗ると漕ぎ出すのを、水にまだ、足を浸したまゝ、鵜のやうな姿で立つて、腰のふたつ提げの煙草入を抜いて、煙管と――一緒に手に持つて、火皿をうつむけにして吹きながら、確かになもんだ／＼と、銚さんの櫓を響めて居た。

最う船が岩の間を出たと思ふと、尖つた舳がするりと、這つて、波の上へ乗つたから、ひやりとして、艀の間へ手を支いた。

其時そのとき緑青ろくしやういろ色の其その切立きつたての巖いはの、渚なぎさで見みたとは趣おもむき
が又また違ちがつて、龜かめの背せにでも乗のりさうな、中なかごろへ、
早薄はやうすもや靄かが掛かつた上うへから、白びやくえ衣いのが桃ももいろ色の、水みづいろ色のが
白しろの手巾はんけちを、二ふたり人で、小ちひさく振ふつたのを、自じぶん分ぶんは胸どう
の間まに、半なかば袖そでをついて、倒たふれたやうになりながら、
帽ぼうし子の裏うちから仰あふいで見みた。

二ふたつ目めの濱はまで、地ぢ曳びきを引ひく人ひとの數かずは、水みづを切きつた
網あみの尖さきに、二すぢ筋くろ黒くろくなつて砂山すなやまかけて遙はるかに見みえた。

船ふねは緑みどりの岩いはの上うへに、浅あさき浅黄あさぎの浪なみを分わけ、おどろ
／＼海草うみくさの亂みだるゝあたりは、黒くろき瀬せを抜ぬけても過すぎ
たが、首くびきり沈しづんだり、又またぶくりと浮ういたり、井桁るげた
に組くんだ棒ぼうの中なかに、生簀いけすが彼方あちこち此方ちこち、三々さん／＼五々ご／＼。鷗かもめ
がちら／＼と白しろく飛とんで、濱はまの二階家かいやのまはり縁えんを、
行ゆきかひする女をんなも見みえ、簾すだれを上げあげる團扇うちはも見みえ、坂さか
道の切通きりどほしを、俾くろまが並ならんで飛とぶのさへ、手てに取とるや
うに見みえたもの。

陸近くがぢかなれば憂きづ慮かひもなく、唯たゞ景色けしきの好よさに、あゝ
まで恐おそろしかつた婆ばの家いへ、巨刹おほでらの藪やぶが其處そこと思おもふ灘なだ

を、何時漕ぎ抜けたか忘れて居たのに、何を考へ出して、又今の厭な年寄。

――それが夢か。――

「ま、待つて、」

はてな、と夫人は、白き頸を枕に就けて、おくれ毛の音するまで、がツくりと打かたむいたが、身の戦くこと猶留まず。

それとも渚の砂に立つて、巖の上に、春秋の美しい雲を見るやうな、三人の婦人の衣を見たのが夢か。海も空も澄み過ぎて、薄靄の風情も妙に餘る。

けれども、犬が泳いで居た。月の中なら兎であらうに。

それにしても、又石屋の親方が、水に亘んだ姿が怪しい。

然ういへば用が用、佛像を頼みに行くのだから、と巡禮染みたま心嬉しく、浴衣がけで、草履で、二

つ目へ出かけたものが、人の背で浪を渡つて、船に乗らうとは思ひもかけぬ。

いや／＼思ひもかけぬといへば、荒物屋の、あの老婆。通りが／＼に、一寸ほんの燐寸を買ひに入つたばかりで、あんな、恐ろしい、忌はしい不氣味なもの、然も晝間見ようとは、それこそ夢にも知らなかつた。

船は其のたためとして見れば、巖の婦人も夢ではない。石屋の親方が自分を背負つて、世話をして呉れたのも、銚さんが船を漕いだのも、汲も、鷗も夢ではなくつて、失張今の夢であらう。

「あゝ、恐しい夢を見た。」

と肩がすくんで、裳わな／＼、瞳を据ゑて恐々仰ぐ、天井の高い事。前後左右は、どのくらゐあるか分らず、凄くてニすことさへならぬ、蚊帳に寂しき寝亂れ姿。

果して夢ならば、海も同じ潮入りの蘆間の水。水の何處からが夢であつて、何處までが事實であつた歟。船は最う一浪で、一つ目の濱へ着くやうになつた時、此處から上つて、草臥れた足で又砂を踏まうより、小川尻へ漕ぎ上つて、蘆の葉を一またぎ、邸の背戸の柿の樹へ、と銚さんの言つた事は――
確に今も覺えて居る。

艚よりは潮が押し入れた、川尻の些と廣い處を、ふら／＼と漕ぎのぼると、浪のさがが翻つて、潮の加減も點燈ごろ。
帆柱が二本竝んで、船が二艘かゝつて居た、舷を横に通つて、急に寒くなつた橋の下、橋杭に水がひた／＼する、隧道らしいも一思ひ。

石垣のある土手を右に、左にいつも見る目より、裾も近ければ頂もづつと高い。かぶさる程なる山を見つゝ、胸ぶくれに廣くなつた、湖のやうな中へ、他所の別荘の芻橋が、流の半、岸近な洲へ掛けたの

が、満潮で板も除けてあつた。箱庭の電信ばしらか
と思ふやう、杭がすく／＼と柱ばかり。三角形の砂
地か向うに、蘆の葉が一靡き、鶴の片翼見るがごと
く、小松も斑に似て十本ほど。

暮れ果てず灯は見えぬが、其の枝の中を透く青田
越しに、屋根の-highは最う我が家。此處の小松の間
を選んで、今日あつらへた地藏菩薩を――
佛様でも大事ない、氏神にして祭禮を、と銑さん
に話しながら見て過ぎると、それなりに川が曲つて、
づつと水が狭うなる、左右は蘆が渺として。

船が其時ぐるりと廻つた。

岸へ岸へと支ふるやう。了つた、潮が留つたと、
銑さんが驚いて言つた。船べりは泡だらけ。瓜の種、
茄子の皮、藁の中へ木の葉が交つて、船も出なけれ
ば芥も流れず。眞水が此處まで落ちて来て、潮に逆
つて揉む所爲で。

あせつて銑さんのおした船が、がツきと當つて杭

に支へた。泡沫が飛んで、傾いた舷へ、ぞろりとかゝつて、さら／＼と亂れたのは、一束の女の黒髪、二巻ばかり杭に巻いたが、下には何が居るか、泥で分らぬ。

あゝ、芥の臭でもすることか、海松布の香でもすることか、船へ搦んで散つたのは、自分と同一鬢水の

―― 浦子は寝ながら呼吸を引いた。――

―― 今も蚊帳に染む梅花の薫。

――

あ、と一聲過かうとする、袖が風に取られたやう、向うへ引かれて、靡いたので、此方へ曳いて壓へた其袖に、と見ると怪しい針があつた。

蘆の中に、色の白い瘡せた嫗、高家の後室ともあらう、品の可い、目の赤いのが、朦朧と踞んだ手から、蜘蛛の圍かと思はれる一糸。

身悶えして引切ると、袖は針を外れたが、さら／

と髪が揺れ亂れた。

其の黒髪船に垂れたのが、逆に上へ、ひよる／＼と頬を掠めると思ふと――（今もおくれ毛が枕に亂れて）――身體が宙に浮くのであつた。

「あゝ！」

船の我身は幻で、杭に黒髪の搦みながら、溺れて居たのが自分であらうか。

又恐しい嫗の手に、怪しい針に釣り上げられて、此の汗、其の水、此の枕、其の夢の船、此の身體、四角な室も穴めいて、膚の色も水の底、おされて呼吸の苦しげなるは、早や墳墓の中にこそ。婀呀、此の髪が、と思ふに堪へず、我知らず、ハツと起きた。

枕を前に、翻つた搔卷を背の力に、堅いものゝ如く腕を解いて、密と其の鬢を搔上げた。我が髪ながらヒヤリと冷たく、褻に亂れた縮緬の、淺黄も色の凄きまで。

疲れて其まゝ、搔卷に頬をつけたなり、浦子はう
と／＼としかけると、胸の動悸に髪が揺れて、頭を
上へ引かれるのである。

「あゝ、」

とばかり聲も出でず、吃驚したやうに又起直つた。

扱帯は一層しやらどけして、褌もいとゞしく崩れ
るのを、懶げに持て扱ひつゝ、忙しく肩で呼吸をし
たが、

「えゝ、誰も来て呉れないのかねえ、私が一人で
こんなに、」

と重たい鬚をうしろへ振つて、其まゝ仰ぎまに倒
れさうな、身を揉んで膝で支へて、ハツと又呼吸を
吐くと、トン／＼と岩に當つて、時々崖を洗ふ浪。
松風が寂として、夜が更けたのに心着くほど、未だ
一聲も人を呼んでは見ないのであつた。

「松か、」

夫人は殘燈に消え残る、幻のやうな姿で、蚊帳の

中から女中を呼んだ。

けれども、直ぐに寐入つたものゝ呼覺される時刻でない。

第一（松、）といふ、其の聲が、出たか、それとも、誰呼んで見ようと心に思つたばかりであるか、それさへも現である。

「松や、」と言つて、夫人は我が聲に我と我が耳を傾ける。胸のあたりで、聲は聞えたやうであるが、口へ出たかどうか、心許ない。

まあ、口も利けなくなつたのか、と情なく、心細く、焦つて、えゝと、片手に左右の胸を揺つて、

「松や、」と、急き調子でもう一度。

（松や、）と細いのが、咽喉を放れて、縁が切れて、たよりなく何處からか、あはれに寂しく此方へ聞えて、遙か間を隔てた襖の隅で、人を呼んで居るかと思はれた。

「あゝ、」とばかり、あらためて、其の（松や、）を言はうとすると、溜息になつて了ふ。蚊帳が煽るか、衾が揺れるか、疊が動くか、胸が躍る

か。膝を組み緊めて、肩を抱いても、びく／＼と身
内が震へて、亂れた襦もはら／＼と靡く。

引搦んでまで、撫でつけた、鬢の毛が、煩くも頬
へかゝつて、其の都度脈を打つて血や通ふ、と次第
に烈しくなるにつれ、上へ釣られさうな、夢の針、
汀の嫗。

今にも宙へ、足が枕を離れやせむ。此の屋根の上
に蘆が生えて、墓所の煙出しが、水面へあらはれる
と、芥溜のごみが淀んで、泡立つ中へ、此の黒髪が
倒に、髻から搦まつて居ようも知れぬ。あれ、然う
いへば、軒を渡る濱風が、さら／＼水の流るゝ響。

恍惚と氣が遠い天井へ、づしりといふ沈んだ物音。

船がそこつた歟、其の船には銚太郎と自分が乗つ

て

今、舷へ髪への毛が。

「あッ、」

と聲立てゝ、浦子は思はず枕許へすつくと立つた
が、あはれ此なりに嫗の針で、天井を抜けて釣上げ
られよう、とあるにもあられず、ばかり膝を支くと、
胸を反らして、抜け出る状に、裳を外。

蚊帳が顔へ搦んだのが、芬と鼻をついた水の香。
引き息で、がぶりと一口、溺るゝかと飲んだ思ひ、
これやがて氣つけになりぬ。

目もやう／＼判然と、蚊帳の緑は水ながら、紅の
絹のへり、斯くて珊瑚の枝ならず。浦子は辛うじて
蚊帳の外に、障子の紙に描かれた、胸白き浴衣の色、
腰の淺黄も黒髪も、夢ならぬ其の我が姿を、歴然と
見たのである。

十七

しばらくして、浦子は玉ぼやの洋燈の芯を挑げて、
明くなつた燈に、寶石輝く指の尖を、一寸髻に觸つ
たが、あらためて又搔上げる。其手で襟を結つて、
扱帶の下で袂を引合はせなどしたのであるが、心に
は、恐ろしい夢に慍うまで疲労して、息づかひさへ
切ないのに、飛んだ身體の世話をさせられて、迷惑
であるが如き思ひがした。

且つ其の身體を棄てもせず、老實やかに、しんせ
つにあしらふのが、何か我ながら、身だしなみよく、
床しく、優しく、嬉しいやうに感じたくらゐ。

一つくゞつて鳩尾から膝のあたりへずり下つた、
其の扱帶の端を引上げざまに、燈を手にして、柳の
隙を上へ引いてすらりと立つたが、小用に、と思ひ

切つた。

時に、障子を開けて、其處が何になつて了つたか、濱か、山か、一里塚か、冥途の途か。船蟲が飛ばうも、大きな油蟲が駈け出さうも料られない。廊下へ出るのは氣がゝりであつたけれど、尚それよりも恐ろしかつたのは、其時まで自分が寢て居た蚊帳の内を窺つて見ることで。

蹴出しも雪の几尖へ、とかくしてずり下り、ずり下る、寢衣の褌を壓へながら、片手で燈をうしろへ引いて、ぼつとする、肩越のあかりに透かして、蚊帳を覗かうとして、爪立つて、前髪を竊と差寄せては見たけれども、夢のために身を悶えた、閨の内の、情ない状を見るのも忌はし、又、何となく搔卷が、自分の形に見えるにつけても、寢て居て、蚊帳を覗ふ此の姿が透いたら、氣絶しないでは濟むまいと、思はずよろ／＼と過つて、引くるまる裳危く、はらりと捌いて廊下へ出た。

次の室は眞暗で、其處には固より誰も居ない。

閨ねやと並ならんで、庭にはを前まへに三間みまつゞ續つゞきの、其その一室ひとまを隔へだてた八疊でぶに、銚せん太郎たらうと、賢けん之助のすけが一つ蚊帳ひとかや。

其處そこから別べつに裏庭うらにはへ突つき胖ゆたでた角座敷かどざしきの六疊でぶに、先生せんせいが寢ねて居ゐる筈はず。

其方そのほうにも廁かはやはあるが、運はこぶのに、些ちと遠とほい。

件くだんの次つぎの明室あきまを越こすと、取とつ着くが板戸いたどになつて、其その臺所いどころを越こした處ところに、松まつといふ仲働なかはたらき、お三さんと、最もう一人ひと女中りぢよちうが三人にん。

婦人をんなばかりでたよりにはならぬが、近ちかい上うへに心安こゝろやすい。

其それに些ちと間あひだはあるが、其處そこから一目ひとめの表門おもてもんの直すぐ内うちに、長屋ながやだちが一軒けんあつて、抱かへ車夫しゃふが住すんで居ゐて、恁かく旦那だんなが留守るすの折をりからには、あけ方がたまで格子かうし戸どから灯あかりがで、ひそめくもの音おと。犇ひし々と花はなふだの響ひびきがするのを、保養ほやうの場所ばしよと大目おほめに見みても、好いいことゝは思おもはなかつたが、時ときにこそよれ頼母たのもしい。さらばと、やがて廊下らうかづたひ、踵かかとの音おとして、ずる／＼と、裳もすその氣勢けはひの聞きこゆるのも、我われながら寂さびしい中に、夢ゆめか

ら覺めたしるしぞ、と心嬉しく、明室の前を急いで
越すと、次なる小室の三疊は、湯殿に近い化粧部屋。
これは障子が明いて居た。

中から風も吹くやうなり、傍正面の姿見に、勿、
映りそ夢の姿とて、首垂るゝまで顔を背けた。

新しい檜の雨戸、それにも顔が描かれさう。眞直
に向き直つて、衝と燈を差出しながら、突あたりへ
辿々しう。

ばたり、閉めた杉戸の音は、恁る夜ふけに、遠く
何處まで響いたらう。

壁は白いが、眞暗な中に居て、唯そればかりを力
にした、玄關の遠あかり、車夫部屋の例のひそ／＼
聲が、此のものの音に八々と留んだを、氣の毒らしく
思ふまで、今夜は其が嬉しかった。

浦子の姿は、無事に厠を背後にして、さし置いた
其の洋燈の前、廊下のはづれに、媚かしく露はれた。

聊か心も落着いて、カチンとせんを、カタ／＼と
さるを抜いた、戸締り嚴重な雨戸を一枚。半ば戸袋
へするりと開けると、雪ならぬ夜の白砂、廣庭一面、
薄雲の影を宿して、屋根を越した月の影が、廂をこ
ぼれて、竹垣に葉かげ大きく、咲きかけるか、今、
開くと、朝の色は何々ぞ。紺に、瑠璃に、紅絞り、
白に、水紅色、水淺黄、蒼の数は分らねども、朝顔
形の手水鉢を、朦朧と映したのである。

夫人は山の姿も見ず、松も見ず、松の梢に寄る浪の、沖の景色にも目は遣らず、瞳を恍惚見据ゑるまで、一心に車夫部屋の灯を、遙に、船の夢の、燈臺と力にしつゝ、手を遣ると、
柄杓に障らぬ。

氣にもせず、なほ上の空で、冷たく瀬戸ものゝ縁を撫でゝ、手をのばして、向うまでい辻らしたが、指にかゝる木の葉もなかつた。

目を返して透かして見ると、これはまた、胸に届くまで、近くあり。

直ぐに取らうとする、柄杓は、水の中をする／＼と、向對まへに、山の方へ柄がひとりで廻つた。

夫人は手のものを落したやうに、俯向いて熟と見る。

手水鉢と垣の間の、月の隈、暗き中に、ほの／＼と白く蠢くものあり。

其の時、切髪の白髪になつて、犬の如く踞つたが、柄杓の柄に、瘦せがれた手を緊乎とかけて居た。

夕顔の實に朱の筋の入つた状の、夢の倂を其まゝに、ぼやりと仰向け、

「水を召されますかいの。」
といふと、艶やかな齒でニヤリと笑む。

息とゝもに身を退いて、蹠跟々々と、雨戸にぴつたり、風に吹きつけられたやうになつて面を背けた。斜ツかひの化粧部屋の入口を、敷居にかけて廊下へ半身、眞黒な影法師のちぎれ／＼な襷褌を被て、茶色の毛のすく／＼と蔽はれかゝる額のあたりに、皺手を合はせて、眞俯向けに此方を拜んだ這身の婆は、坂下の藪の姉様であつた。

最う筋も抜け、骨崩れて、裳はこぼれて手水鉢、砂地に足を踏み亂して、夫人は橋に廊下へ倒れる。

胸の上なる雨戸へ半面、ぬツと横ざまに突出したは、青ンぶくれの別の顔で、途端に銀色の眼をむいた。

のさ／＼のさ、頭で廊下をすつて来て、夫人の枕

に近づいて、ト仰いで雨戸の顔を見た、額に二つ金の瞳、眞赤な口を横ざまに開けて、

「ふアはゝゝゝ、」

「う、うふゝ、うふゝ、」

と傾がつて、戸を揺つて笑ふと、パチヤリと柄杓を水に投げて、赤目の嫗は、

「おほゝゝほゝ、」

と尋常な笑ひ聲。

廊下では、其の握られた時氷のやうに冷たかつた、といった手で、頬にかゝつた鬢の毛を弄びながら、

「洲の股の御前も、山の峡の婆さまも早かつた

な。」といふと、

「坂下の姉さま、御苦勞にござるわや。」と手水鉢から見越して言つた。

銀の目をじろ／＼と、

「さあ、手を貸され、連れて行にましょ。」

「これの、吐く呼吸も、引く呼吸も、最うないかいの、」と洲の股の御前がいへば、

「水くらはしや、」

と峡の婆が邪慳である。

「こゝで坂下の姉様は、夫人の前髪に手をさし入れ、白き額を平手で撫でゝ、

「まだぢや、ぬく／＼と暖い。」

「手を掛けて肩を上げさせ、私が腰を抱かうわいの。」

と例の横あるきに其の傾いた形を出したが、腰に組んだ手は其のまゝ也。

洲の股の御前、傍より、

「お婆さん、一寸其の三の針で口の端縫はつしやれ、聲を立てると悪いわや。」

「おいの、然うぢやの、」と廊下でいつて、夫人の黒髪を両手で壓へた。

峡の婆、僅に手を解き、頤で襟を探つて、無性ら

しく撮み出した、指の爪の長く生伸びたかに見える
のを、一つぶる／＼と掉つて近づき、お伽話の繪に
描いた外科醫者といふ體で、震く脣に幽に見える、
夫人の白齒の上を縫ふよ。

浦子の姿は烈しく揺れたが、聲は始めから得立て
なかつた。目はニいて居たのである。

「最う可いわいの、」

と峡の婆、傍に身を開くと、坂の下の姉様は、夫
人の肩の下へ手を入れて、兩方の傍を抱いて起した。

浦子の身は、柔かに半ば起きて凭れかゝると、其
まゝ庭へずり下りて、

「ござれ、洲の股の御前、」

といつて、坂下の姉様、夫人の片手を。

洲の股の御前も、おなじく傍から夫人の片手を。

ぐい、と取つて、引立てる。右と左へ、なよやか
に脇を開いて、扱帯の端が縁を離れた。髪かみの根ねは鬚まげ
ながら、笄かうわいながら、がツくりと肩かたに崩くづれて、早はや五
足あしばかり、釣つられ工合くあひに、手水鉢てうづばちを、裏うらの垣根かきねへ誘さそ
はれ行く。

背後に残つて、砂地に獨り峽の婆、件の手を腰に
極めて、傾がりながら、片手を前へ、斜めに一煽り、
八たと煽ると、雨戸はおのづからキリ／＼と動いて
閉つた。

二人の婆に挟まれ、一人に導かれて、薄墨の繪の
やうに、潜門を連れ出さるゝ時、夫人の姿は後ざま
に反つて、肩へ顔をつけて、振返つてあとを見たが、
名残惜しさうではなれであつた。

時しも一面の薄霞に、處々艶あるやう、月の影に、
雨戸は寂と連つて、朝顔の葉を吹く風に、颯と亂れ
て、鼻紙がちら／＼と、蓮歩のあとの此處彼處、夫
人をしたうて散々なり。

* * * * *

あと白浪の寄せては返す、渚長く、身はたゞ、黄
なる雲を蹈むかと、裳も空に濱邊を引かれて、どれ
だけ來たか、海の音の唯轟々と聞ゆるあたり。

「此處ぢや、此處ぢや。」

「どしりと夫人を横倒。」

「来たぞや、来たぞや、」

「今は早や、氣隨、氣まゝになるのぢやに。」

何處の果かい砂の上。此處にも船の形の鳥が寝て居た。

ぐるりと三人、三つ鼎に夫人を巻いた、金の目と、銀の目と、紅絲の目の六つを、兇き星の如くキラ／＼と砂の上に輝かしたが、

「地藏菩薩祭れ、ふアふア、」と嘲笑つて、山の峽がハタと手拍子。

「山の峽は繁昌ぢや、あはゝ、」と洲の股の御前、足を擧げる。

「洲の股もめでたいな、うふゝ、」
と北叟笑みつゝ、坂下の嫗は隈を捻つた。

諸聲に、

「ふアふアふア、」

「うふゝ、」

「あはゝゝは。」

「坂の下祝ひましょ。」

今度は洲の股の御前が手を拍つ。

「地藏菩薩祭れ。」

と山の峽が一足出る、其のあとへ臀が捻つて、

「山の峽は繁昌ぢや。」

「洲の股もめでたいな、とすらりと出る。」

拍子を取つて、手を拍つて、

「坂の下祝ひましょ。」

据ゑ腰で、ぐいと伸び、

「地藏菩薩祭れ。」

「山の峽は繁昌ぢや、」

「洲の股もめでたいな、」

「坂の下祝ひましょ、」

「地藏菩薩祭れ。」

さす手ひく手の調子を合はせた、浪の調、松の曲。

おどろ／＼と月落ちて、世はたゞ靄となる中に、も
のゝ影が、躍るわ、躍るわ。

「こゝに、一一つ目と二つ目の濱境、浪間の巖を裾に浸して、路傍に衝と高い、一座螺の如き丘がある。

その頂へ、あけ方の目を血走らして、大息を吐いて、狭島に宿れる鳥山康平。

例の縞の襯衣に、其紺の單衣を着て、紺の小倉の帯をぐる／＼と巻きつけたが、じん／＼端折りの空脛に、草履ばきで帽は冠らず。

「昨日は折目も正しかつたが、露にしをれて甲斐性が無さう、高い處で投首して、太く草臥れた状が見えた。恐らく驚破といつて跳ね起きて、別荘中、上を下へ騒いだ中に、襯衣を着けて一つ／＼其のこはぜを掛けたくらゐ、落着いて居たものは、此の人物ばかりであらう。

それさへ、夜中から暁へ引出されたやうな、とり留めのないなり形、他の人々は思ひやられる。

銚太郎、賢之助、女中の松、仲働、抱へ車夫は云

ふまでもない。折から居合はせた賭博仲間の漁師も
四五人、別荘を引ぶるつて、八方へ手を分けて、急
に姿の見えなくなつた浦子を捜しに駆け廻る。今し
がた路を挟んだ向う側の山の裾を、ちら／＼と靄に
點れて、松明の火の飛んだも其よ。廉平が此の丘へ
半ば攀ぢ上つた頃、消えたか、隠れたか、やがて見
えなくなつた。

固より當のない尋ね人。何處へと、見當は些とも
着かず、唯足にまかせて、彼方此方、同じ處を四五
度も、凡そ二三里の路は最う歩行いた。
不祥な言を放つものは、曰く廁から月に浮かれて、
浪に誘はれたのであらうも知れず、と即ち船を漕ぎ
出したのも有るほどで。

死んだは、活きたは、本宅の主人へ電報を、と蜘蛛
手に座敷へ散り亂れるのを、騒ぐまい、騒ぐまい。
毛色のかはつた犬一疋、匂の高い總菜にも、見る目、
嗅ぐ鼻の狭い土地から、倂を夢に見て、山へ百合の
花折りに飄然として出かけられたかも料られぬを、
狭島の夫人、夜半より、其の行方が分らぬなど、

騒ぐまいぞ、各自。心して内分にお捜し申せと、獨り押鎮めて制した此の人。

廉平とても、夫人が魚の寄るを見ようでなし、こんな丘へ、よもや、とは思つたけれども、さて、何處、といふ目的がないので、船で捜しに出たのに對して、そゞろに雲を攫むのであつた。

目の下の濱には、細い木が五六本、ひよろ／＼と風に揉まれたまゝの形で、静まり返つて見えたのは、時々潮が満ちて根を洗ふので、梢はそれより育たぬならむ。丁ど引潮の海の色は、煙の中に藍を湛へて、或は十疊、二十疊、五疊、三疊、眞砂の床に絶えては連なる、平らな岩の、天地の奇しき手に、鐵槌のあとの見ゆるあり、削りかけの鑪の目の立つたるあり。鑿の齒形を印したる、鋸の屑かと缺々したる、其の一つ一つに、白波の打たで翻るとばかり見えて音のないのは、岩を飾つた海布、ところ、あはび、蠣などいふものゝ、夜半に吐いた氣を收めず、未だほの／＼と揺ぐのが、渚を籠めて蒸すのである。

漁家二三。―― 深々と苦屋を伏せて、屋根よ

り高^{たか}く口^{くち}を開^あけたり、家^{いへ}より大^{おほ}きく底^{そこ}を見^みせたり、
ころり／＼と大^{おほ}畚^{びく}が五つ六つ。

さて此の丘の根に引寄せて、一艘苦を掛けた船があつた。海士も衰きる時雨かな、潮の繁吹は浴びながら、夜露や厭ふ、ともの優しく、よろけた松に小網を控へ、女男の渡の姿に擴げて、すら／＼と乾した網を數寢に、舢の口がすや／＼と、見果てぬ夢の岩枕。

傍なる苦屋の背戸に、緑を染めた青菜の畠、結び繞らした蘆垣も、船も、岩も、唯なだらかな面平に、空に躍つた勿釣瓶も、靄を放れぬ黒い線。些の凹凸なく瞰下さるゝ、恚る一枚の繪の中に、裳の端さへ、片袖さへ、美しき夫人の姿を、何處に隠すいべくも見えなかつた。

康平は小さな其の下界に對して、高く雲に乗つたやうに、圓く靄に包まれた丘の上に、踏はづしさうに崖の尖、五尺の地藏の像で立つたけれども。
頭を垂れて嘆息した。

されば此の時の風采は、惡魔の手に捕へられた、
一體の善女を救ふべく、こゝに天降つた菩薩に似ず、
仙家の僕の誤つて廬を破つて、下界に追ひ下された
哀れな趣。

廉平は腕を拱いて悄然としたのである。時に海の上
にひらめくものあり。

翼の色の、鷗や飛ぶと見えたのは、渡に静かな白
帆の片影。

帆風に散るか、靄消えて、唯見れば、海に露れた、
一面大なる岩の端へ、船はかくれて帆の姿。

ぴたりとついて留まつたが、翻然と此方へ向をか
へると、渚に据つた丘の根と、海なる其岩との間、
離座敷の二三間、中に泉水を湛へた状に、路一條、
東雪のあけて行く、青空の透く如く、薄絹の雲左右
に分れて、巖の面に靡く中を、船は唯動くともなく、
白帆をのせた海が近づき、やがて横ざまに軽く又渚
に止つた。

帆の中より、水際立つて、美しく水淺黄に朝露置

いた大輪の花一輪、白砂の清き濱に、臺や開くと、
裳を捌いて衝と下り立つた、洋装したる一人の婦人。

夜干に敷いた網の中を、ひら／＼と拾つたが、朝
景色を賞つるよし／＼て、四邊を見ながら、其の苦船
に立寄つて苦の上に片手をかけたまゝ、船の方を顧
みると、千鳥は鳴かぬが友呼びつらむ。帆の白きよ
り白衣の婦人、水紅色なるが又一人、續いて前後に
船を離れて、左右に分れて身輕に寄つた。

二人は右の舷に、一人は左の舷に、其の苦船に身
を寄せて、互に苦を取つて分けて、船の中を差覗い
た。淡きいろ／＼の衣の裳は、長く渚へ引いたので
ある。

康平は頂の靄を透かして、足許を差覗いて、渠等
三人の西洋婦人、惟ふに詭への出来を見に來たな。
苦をふいて伏せたのは、此の人々の証文で、濱に新
造の短艇でゝでもあるのであらう。

唯見ると二人の脇の下を、翻然と飛び出した猫が

ある。

トタンに一人の肩を越して、空へ躍るかど、もう
一匹、續いて舐から衝と抜けた。最後のは前脚を揃
へて海へ一文字、細長い茶色の胴を一畝り畝らした
まで鮮麗に認められた。

前のは白い毛に茶の斑で、中のは、其の全身漆の
如きが、長く掉つた尾の先は、舐を掠めて失
せたのである。

爾時、前後して、苦からいづれも面を離し、はら／＼と船を退いて、ひたと顔を合はせたが、方向をかへて、三人とも四邊を三してイむ状、おぼるげながら判然と廉平の目に瞰下された。

水浅黄のが立樹に寄つて、其處ともなく仰いだ時、頂なる人の姿を見つけたらしい。

手を舉げて、二三度續ざまに麾くと、あとの二人もひら／＼と、高く手巾を掉るのが見えた。

要こそあれ。

廉平は雲を抱くが如く上から望んで、見えるか、見えぬか、慌しく頷き答へて、直ちに丘の上に踵を回らし、榮螺の形に切崩した、處々足がりの段のある坂を縫つて、ぐる／＼と駈けて下り、裾を傳うて、衝と高く、ト一飛低く、草を踏み、岩を渡つて、凡そ十四五分時を経て、此處ぞ、と思ふ山の根の、波に曝された岩の上。

綱もあり、立樹もあり、大きな畚も、また其の畚の口と肩ずれに、船を見れば、苦蕒いたり。あの位高かつた、丘は近く頭に望んで、崖の青芒も手に届くに、婦人たちの姿はなかつた。白帆は早や渚を彼方に、上からは平であつたが、胸より高く踞まる、海の中なる巖かげを、明石の浦の朝霧に島がくれ行く風情にして。

却つて別なる船一艘、ものかげに隠れて居たらう。はじめに此處に見出されたが、一つ目の濱の方へ、半町ばかり濱のなぐれに隔つる處に、箱のやうな小船を浮いべて、九つばかりと、八つばかりの、眞黒な男の兒。一人はツヤシと艫柄を取つて、丸裸の小腰を据ゑ、壓すほどに突伏すやう、引くほどに仰反るやう、唯其處ばかり海が動いて、舳を揺り上げ、揺り下すを、面白さうに。

釋い方は、両手に舷に掴まりながら、これも裸の肩で躍つて、だぶりだぶり／＼／＼と同一處にもう一艘、渚に纜つた親船らしい、艫を操る兒の丈より高い、他の舷へ波を浴びせて、ヤツ、シツシ。

いや、道草する場合でない。

康平は、言葉も通ぜず、國も違つて便がないから、かはつて處置せよ、と暗示されたかの如く、其の苦船の中に何事かあることを悟つたので、心しながら、氣は急ぎ、つか／＼と毛脛長く藁草履で立寄つた。濱に苦船は是には限らぬから、確に、上で見て居たのと、頂を仰いで一度。先づ其の二人が前に立つた、左の方の舷から、ざくりと苦を上へあげた。

ざら／＼と藁が揺れて、廣き額を差入れて、べとりと頤髻一面な其の柔和な口を結んで、足をや／＼爪立つたと思ふと、兩の肩で、吃驚の腹を揉んで、けた／＼ましく飛び退いて、下なる網に躓いて倒れぬばかり、きよとんととして、太い眉の顰んだ下に、眼を圓にして四邊を眺めた。

此なる丘と相對して、對うなる、海の面にむら／＼と蔓つた、鼠色の濃き雲は、彼處一座の山を包んで、未だ霽れやらぬ朝靄にて、もの凄じく空に沖つ

て、焰ほのほの連つらなつて然もゆるが如ごときは、やがて九十度どを越こえ
むずる、夏なつの日ひを海氣かいきにつゝんで、崖がけに草くさなき赤地あかつち
へ、仄ほのかに反映はんえいするのである。

かくて一ひとつ目めの濱はまは彎入わんにふする、海うみにも濱はまにも此この
時とき、人ひとはたゞ廉平れんべいと、親船おやふねこを漕こぎ繞めぐる長幼ちやうえう二人ふたりの裸はだ
兒かこあるのみ。

得も言はれぬ顔して、しばらく棒の如く立つて居た、廉平は何思ひけむ、足を此方に返して、づつと身を大きく巖の上へ。

それを下りて、渚づたひ、船を弄ぶ小兒の前へ。

近づいて見れば、渠等が漕ぎ廻る親船は、其の舳を波打際。朝凧の海、穏かに、眞砂を拾ふばかりなれば、纜も結ばず漾はせたのに、呑氣にごろりと大の字形。楫を枕の邯鄲子、太い眉の秀でたのと、鼻筋の通つたのが、眞向けさまの寝顔である。

傍の船も、穉いものも、惟ふに此の親の、子なのであらう。

康平は、ものも言はずに駈け歩いた聲を先づ調へようと、打咳いたが、えへん！ と大きく、調子はづれに響いたので、襯衣の袖口の弛んだ手で、其の口許を蔽ひながら、

「おい、おい。」

寝た人には内證らしく、低調にして小児を呼んだ。
「おい、其の兄さん、其方の兒。むゝ、然うだ、
お前達だ。上手に漕ぐな、甘いものだ、感心なもん
ぢやな。」
聲を掛けられると、跳上つて、船を揺ること木の
葉の如し。

「あぶない、これ／＼、話がある、まあ、一寸静
まれ。」

おゝ、伶俐々々、よく言ふことを肯くな。
何ぢや、外ぢやないがな、どうだ餘り感心したに
就いて、最うち些ツと上手な處が見せて貰ひたいな。
何うぢや、づつと漕げるか。そら、あの、そら巖
のもつとさきへ、海の真中まで漕いで行けるか、何
うぢやらうな。」

寄居蟲で釣る小鰻ほどには、こんな伯父さんに馴
染のない、人馴れぬ里の兒は、目を光らすのみ、返
事はしないが、年紀上なのが、艫の手を止めつゝ、
けるりで、合點の目色をする。

「漕げる？む、漕げる！ 豪いな、漕いで見せな／＼。伯父さんが、又褒美をやるわ。」

いや、親仁、何よ、お前の父さんか、父爺には黙つてよ、父爺に肯くと、危いとか悪戯をするなとか、何とか言つて叱られら。そら、な、可いか、黙つて／＼。」

といふと、又合點々々。よい、と壓した小腕ながら艫を壓す精巧な昆倫奴の器械のやう、インツと一聲飛ぶに似たり。疾い事、但し揺れる事、中に乗つた幼い方は、アハ、アハ、と笑つて跳ねる。

「豪いぞ、豪いぞ。」

といふのも憚り、唯さしまねいて褒めそやした。小船は見る／＼廉平の高くあげた手の指を離れて、岩がくれにやがて唯雲をこぼれた點となぬ。

親船は他愛がなかつた。

廉平は急ぎ足に取つて返して、又丘の根の巖を越して、苦船に立寄つて、此方の船舷を横に傳うて、二三度、同じ處を行つたり、來たり。

中なかごろで、踞しゃがんで畚びくの陰かげにかくれたと思おもふと、又また
突立つゝたつて、端はしの方ほうから苦とまを撫なでたり、上うへから密そつと叩たゝ
きなどしたが、更さらに彼方あちこち此方こちをみまはして、ぐるりと舐へき
の方ほうへ廻まはつたと思おもふと、向むかうの舷ふなばたの陰かげになつた。

苦とまがばら／＼と煽あふつたが、「あゝ」と息いきの下したに
叫さけぶ聲こゑ。藁わらを分わけた艶えんなる片袖かたそで、淺黄あさぎの裓つまが船ふねから
こぼれて、其その浴衣ゆかたの染そめ、其その扱しごき帯おび、其その黒髪くろかみも、
其その手足てあしも、ちぎれ／＼に成なつたかと、砂すなに倒たふれた
婦人をんなの姿すがた。

「氣を静めて、夫人、確乎しなければなりません。落着いて、可いですか。心を確にお持ちなさいよ。

判りましたか、私です。

用も恥かしい事はありません、些とも極りの悪いことはありませんです。確乎なさい。

「御覽なさい、誰も居ないです、唯私一人です。

鳥山唯た一人、他には誰も居らんですから。」

海の方を背にして安からぬ状に附添つた、廉平の足許に、見得もなく腰を落とし、裳を投げて崩折れつゝ、兩袖に面を蔽うて、ひたと打泣くのは夫人であつた。

「眞個に夫人、氣を落着けて下さらんでは不可ません。突然海へ飛込まうとなすつたりなんぞして、串戯ではない。えゝ、夫人、心が確になつたです

か。」

聲にはかり力をを籠めて、何うしようにも先は婦人、ひとへに目を見据ゑて言ふのみであつた。

風かぜそよ／＼と呼吸いきするやう、すゝりなきの袂たもとが揺れた。浦子うらこは涙なみだの聲こゑの下した、
「先生せんせい、」と幽かすかにいふ。

「はあ、はあ、」
と、纒わづかに便たよりを得えたらしく、我われを忘わすれて擦すり寄よつた。

「私わ、私わたしは、もう死しんで了しまひたいのでござい
ます。」

わツと又また忍しのび音ねに、身悶みもだえして突伏つきふするのである。

「何故なぜですか、夫人おくさん、未だ、何どうかしておいでな
さる、丁ちやうとなやせんさらんなくツては不い可かんですよ。」

「でも、貴下あなた、私わたしは、もう
」

「はあ、どうなすつた、どんなお心持こころもちなんです

か。

「先生せんせい」

「はあ、何どうですな。」

「私わたしが、あの、海うみへ入はひつて死しなうといたしました
のより、貴下あなたは、もつとお驚おどろきなさいました事ことがご
ざいませう。」

「何と言はうと、黙つて唾を呑む。」

「私が、私が、こんな處に船の中に、寢て、寢

て、

と泣いじやくりして、

「寢かされて居りましたのに、尚ほ吃驚なさいま

してせうねえ、貴下。」

「ですが、それは、しかし

とばかり、康平は言ふべき術を知らなかつた。

「先生、」

是れ切り、聲の出ない人にならうも知れず、と手

に汗を握つたのが、我を呼ばれたので、力を得て、

耳を傾け、顔を寄せて、

「は、」

「此處は、何處でございます。」

「此處ですか、此處は、一つ目の濱を出端れた、

崖下の突端の處ですが、」

「もう、夜があげましたのでございますか。」

「明けたですよ。明方です、最う日が當るばかり

です。」

聞くや否や、

「えゝ！」と又身を震はした。浦子は其なり、腰を上げて立たうとして、まゝならぬ身をあせつて、
「恥かしい、私、恥かしいんですよ。先生、何うしませう、人が見ます。人が来ると不可ません、人に見られるのは厭ですから、何うぞ死なして下さいまし、死なして下さいましよ。」

「兎、兎も角。ですからな、夫人、人が来ない内に、帰りませう。未だ大して人通もないですから。疾く、さあ、疾く歸らうではありませんか。お内へ行つて、まづ、お心をお鎮めなさい、然うなさい。」

浦子は烈しく頭を掉つた。

爲む術を知らず黙つても、未だ頭をふるのであるから、康平は茫然として、唯拳を握つて、

「何うなさる。恚うしていらしつては、それこそ、人が寄つて来るか分りません。第一、捜しにしましたのでも四人や八人ではありません。」

言ひも終らず、あしずりして、

「何うしませう、私、どうしませうねえ。何うぞ、どうぞ、貴下、一思ひに死なして下さいまし、恥かしくつても、死骸になれば」

泣くのに半ば言消えて、

「よ、後生ですから、
も曇れる聲なり。」

心弱くて叶ふまじ、と康平は稍屹としたものいひで、

「飛んだ事を！ 夫人、廉平が此處に居るです。決して、決して、そんな間違はさせんですよ。」

「何うしませうねえ、」

「はツと深く溜息つくのを、

唯咽喉を詰めて熟と見つゝ、思はず引き入れられて欺息した。

廉平は太息して、

「まあ、貴女、夫人、一體どうなさつた。」

「譯を、譯をいへば貴下、黙つて死なして下さいますよ。最う、最う、最う、最う、こんな汚らしいものは、見るのも厭におなりなさいますよ。」

「否、厭になるか、なりませんか、黙つて見殺しにしませんか。何しろ、譯をおつしやつて下さい。夫人、廉平です。人にいつて悪い事なら、私は盟つて申しはせんです。」

此の人の平生は恁く盟ふのに適して居た。

「は、申します、先生、貴下だけなら申します。」
「言うて下さるか、それは難有い、むゝ、さあ、承りませう。」

「どうぞ、其の、其の前に先生、何處へか、人の

居あない、谷底たにそこか、山やまの中なかか、島しまへでも、巖穴いはあなへでも、お連れつなすつて下くださいまし。もう、貴下あなたにはかりも精一杯せいぱい、誰だれにも見みせられます身からだ體だではないんです。」

袖そでを僅わずかに濡ぬれたる顔かほ、夢見ゆわみるやうに恍惚うつとりと、朝あさぼらけなる醉芙蓉すゐふよう、色いろをさました涙なみだの雨あめも、露つゆに宿やどつてあはれである。

「人ひとの來こない處ところといつて、お待まちちなさい、船ふねで、も何方どちらへか、」

と心當こころあたりがなくてもなかつた。沖おきの方ほうへ見みえ初そめて、小兒こどもの船ふねが霧もやから出でて來きた。

夫人ふじんは時ときにあらためて、世よに出でたやうな目まなざし、たが、苦船とまぶねを一ひとめ目見みると、目まぶちへ、颯さつと――

蒼あをざめて、悚然ぞつとしたらしく肩かたをすくめた、黒髮くろかみおもげに、沖おきの方かた。

「もし、」

「は、」

「參まゐられますなら、彼處あそこへでも。」

如何にも人は籠らぬらしい、物凄じき對岸の岨、
炎を宿して冥々たり。

「あんな、あんな其の、地獄の火が燃えて居りま
すやうな、あの中へ、」

「結構なんでございます、」と、又打消れて面
を背ける。

よく／＼の事なるべし。

「参りませうか。靄が霽れば、此處と向ひ合つ
た同一やうな崖下でありますけれども、途中が海で
切れとるですから、濱づたひに人の來る處ではあり
ません。

御覽なさい、あの小兒の船を。大丈夫漕ぐです
ら、彼に乗せて貰ひませう、如何です。」

夫人は、がツくりして頷いた、ものを言ふも切な
さうに太く疲勞して見えたのである。

「夫人、それでは。」

「はい、」

と言つて禮心に、寂しい笑顔して、吻と息。

「そんな、そんな貴女、詰らん、怪しからん事があるべき次第のものではないです。汚れた身體だの、人に顔は合はされんのお言ひなさるのは其の事ですか。はゝゝはゝゝ、いや、しかし飛んだ目にお逢ひでした。些とも御心配はないですよ。まあ、其の足をお拭きなさい。突然こんな處へ着けたですから、船を離れる時、酷くお濡れなすつたやうだ。」

廉平は砥に似て蒼き條のある滑かな一座の岩の上に、海に面して見すばらしく踞んだ、身にたゞ襯衣を纏へるのみ。船の中でも人目を厭つて、紺がすりの其の單衣で、肩から深く包んで居る。浦子の蹴出しは海の色、巖端に蒼澄みて、白脛も水に透くやう、倒れた風情に休らへる。

二人は靄の薄模様。

「構はんですから、私の衣服でお拭きなさい。何、寒くはないです、寒いどころではないですが、

貴女、裾が濡れましたで、氣味が悪いであります
う。」

「否、もう潮に濡れて氣味が悪いなぞと、申され
ます身體ではありません。」

と、投げたやうに岩の上。

「まだ、おつしやる！」

「はゝゝゝ、」

と廉平は笑ひ消したが、自分にも疑ひの未だ解け
ぬ、蘆の中なる幻影を、此際なれば氣もない風で、
「夢の中を怪しいものに誘ひ出されて、苦船の中
で、お身體を なんといふ、そんな、そんな
な事がありますものかな。」

「それでも私、」

と、恚る中にも夫人は顔を赧らめた。

「覺えがあるのでございますもの。貴下が氣をつ
けて下すつて、あの苦船の中で漸々自分の身體にな
りました時も、然うでした、
まあ、お恥かしい。」

といひかけて差俯向く、額に亂れた前髪は、齒に
も噛むべく怨めしさう。

「ですが、ですが、それは心の迷ひです。昨日あたりから何うかなさつて、お身體の工合が悪いのでせう。西洋なぞにも、」

言の下に聞き咎め、

「西洋とおつしやれば、貴下は西洋の婦人の方が、私のつかまつて居りました船の中を覗いて見て、仔細がありさうに招いたのを、丘の上から御覽なすつて、それでお心着きになりましたつて。」

其時も、苦を破つて獸が飛んで行つたとおつしやるではございませんか。

ですから私は、」

と早や力なげに、なよ／＼とするのであつた。

「否、」

と當なしに大きく言つた、が、否な事は些ともない。何うして發見したかを怪しまれて、灣の口を横ぎつて、小兒に船を漕がせつゝ、自分が語つたは、まづ其の通。

「ですけれども、何ですな。」

「否、」

今度は夫人から遮つて、
「最う昨日、二つ目の濱へ参りました途中から、
それは／＼貴下、忌はしい恐ろしい事ばかりで、私
は何だか約束ごとのやうに存じます。」

三十といふ年に近いこの年になりますまで、少い
折から何一つ苦勞といふことは知りませんで、悲し
い事も、辛い事もつひぞ覺えはありません、未だ實
家には兩親も達者で居ます身の上ですもの。

腹の立つた事さへござんせん、餘り果報な身體で
すから、盈れば虧くるとか申します通り、こんな恐
しい目に逢ひましたので。唯今こゝへ船を漕いで呉
れました小兒たちが、年こそ違ひますけれども、そ
つくり大きいのが銑さん、小さい方が賢之助に肖て
居りましたのも、皆私の命數で、何かの因縁なんで
ございませうから。」

いふことの極めて確かに、心狂へる様子もないだ
け、廉平は一層慰めかねる。

夫人は纔に語るうちも、あまたゝび息を繼ぎ、
 「小兒と申しても繼しい中で、それでも姉弟とも、
 眞の兒とも、賢之助は可愛くツてなりません。唯心
 にかゝりますのはそれだけです、それも長年、貴
 下が御丹精下さいましたお庇で、高等學校へ入學も
 出来ましたのでございますから、屹と私の思ひでも、
 一人前になりませう。

もう私は、こんな身體、見るのも厭でなりません。
 ぶつ／＼切つて刻んでも棄てたいやうに思ふんです
 もの、些とも残り惜いことではないのですが、慾には、
 此の上の願ひには、これが、何か、義理とか意氣と
 か申すので死ぬんなら、本望でございすのに、活
 きながら畜生道とは何うした因果なんでございませ
 うねえ。」

と、心もやゝ落着いたか、先のやうには泣きもせ
 で、濁りも去つた涼しい目に、ほろりとしたのを、
 熟と見て、康平堪りかねた面色して、脣をわなゝか

し、小鼻に柔和な皺を刻んで、深く兩手を拱いたが、
噫、我嘗て誓ふらく、如何なる時にのぞまむとも、
我心、我が姿、我が相好、必ず一體の地藏の如く爾
くある可き也と、そもさんか菩薩。

「夫人、どうしても、貴女、怪い獣に

といふ、疑は解けんですか。」

「はい、お恥かしう存じます。」

と手を支いて、誰にか詫び入る、其のいぢらしさ。

眼を閉ぢたが、しばらくして、

「恐るべきです、恐るべきだ。夢現の貴女には、
悪獣の體に見えましたでありませう。私の心は獣で
した。夫人、懺悔をします。康平が白状するです。
あなたに恥辱を被らしたものは、四脚の獣ではない、
獣のやうな人間ぢや。」

私です。

鳥山康平一生の迷ひぢや、許して下さい。「と、
其の襯衣ばかりの頸を垂れた。

夫人はハツと顔を上げて、手をつきざまに右視左

瞻つゝ、背に亂れた千筋の黒髪、解くべき術もないのであつた。

「許して下さい。お宅へ參つて、朝夕、貴女に接したのが因果です。賢君に對して殆んど献身的に盡したのは、やがて、これ、貴女に生命を捧げて居たのです。

未だ四四十といふ年にもならんで、御存じの通り、私は、色氣もなく、慾氣もなく、見得もなく、凡そ出世間的に超然として、何か、未來の靈光を認めて居るやうな男であつたのを御存じでせう。

なか／＼以て、未來の靈光ではなく、貴女の其の美しいお姿ぢやつた。

けれども、到底尋常では望みのかなはぬことを悟つたですから、此度當地の別荘をおなごりに、貴女のお傍を離れるに就いて、非常な手段を用ゐたですよ。

五年勤勞に酬いるのに、何か記念の品をと望まれ

て、悟も徳もなく居ながら、唯佛體を建てるのが、おもしろい、工合のいゝ感じがするで、石地藏を願ひました。

今の世に、然やうな變つたことを言ひ、かはつたことを望むものが、何をするとお思ひなさる。

康平は魔法づかひぢや。

と石上に跌坐した其の容貌、其の風采、或は然あるべく見えるのであつた。

夫人は、唯もの言はむとして脣のわなゝくのみ。

「貴女も、昨日、其の地藏をあつらへにおいでの途中から、怪しいものに憑かれたとおつしやつた。

凡て、それが魔法なので、貴女を魅して、夢現の境に乗じて、其の妄執を晴しました。

けれども餘りに痛い。ひとへに獸にとお思ひなすつて、玉の如き其のお身體を、砕いても切つても棄てたいやうな御容子が、餘りお可哀相で見居られん。

夫人、眞の獸より、未だ此の廉平と、思し召す方
が、いくらかお心が濟むですか。」「
夫人はせい／＼息を切つた。

二十八

「如何ですか、餘り推つけがましい申分ではありませんが、心はおなじ畜生でも、いくらか人間の顔に似た、口を利、手足のある、康平の方が可いですか。」

口へ出すとよりは聲をのんで、

「貴下、」

「」

「貴下、」

「」

「貴下、眞個でございますか。」

「勿論、慥悔

したのぢやで。」

と、眉を開いてきつぱりといふ。

膝でじりりとすり寄つて、

「えゝ、嬉しい。貴下、よくおつしやつて下さい

ました。」

と緊乎と膝に手をかけて、わツと又泣きしづむ。

廉平は我ながら、訝しいまで胸がせまつた。

「私と言はれて、お喜びになりますほど、それはどの思をなさつたですか。」

「いゝえ、もう、何ともたとへやうはござんせん。死んでも死骸が残ります、其の獸の爪のあと舌のあとのあります、毛だらけな膚が残るのですもの。焼きまして狐狸の悪い臭がしませうかと、心残りがありましたのに、貴下、よく、思ひ切つて然うおつしやつて下さいました。快よく死なれます、死なれるんでございますよ。」

「はてさて、」

「ぢや、矢張、死ぬのを思ひ止まつちや下さらん。」

顔を見合はせ、打顔き、

「むゝ成程、」

と腕を解いて、廉平は従容として居直つた。

「成程、然うぢや。貴女ほどのお方が、恚る恥辱をお受けなさつて、夢にして、ながらへておいでなさる筈ではないのぢやつた。」

「慨悔をいたせば、悪い夢とあきらめて、思ひ直して頂けることもあらうかと思つたですが、如何にも取返しに着かんお身體にしたのぢやつた、恥入ります。」

夫人、貴女ばかりは殺しはせんのだぢや。」

「否、飛んだことをおつしやいます。殿方には何でもないのをごいいますもの、而して燬悔には罪が消えますと申します、お怨みには思ひません。」

「許して下さいさるか。」

「女の口から行き過ぎではございますが、」

「許して下さいさる。」

「はい、」

「それでは何ぞ、思ひ直して、」

「私はもう、」

と衝と前襟を引寄せ、岩の下を掻いくゞつて、下の根のうつろを打つて、絶えず、丁丁と鼓の音の響いたのが、潮や満ち来る、どツと烈しく、二碎け

た波がしら、白瀧を倒に、颯とばかり雪を崩して、
浦子の肩から、頭から。

「あ、」と不意に呼吸を引いた。濡れしぼたれた黒髪に、玉のつらなる雫をかくれば、南無三浪に攫はるゝ、と背を抱くの身に恚せて、觀念した顔の、氣高きまでに莞爾として、

「あゝ、恚うやつて一思ひに。」

「夫人、おくれはせんですよ。」と、顔につらゝを注いで言つた。打返しが又ざつと。

「繁吹が繁吹かゝる、危いぞ。」

と、空から高く呼はる聲。

靄が分れて、海面に兀として聳え立つた、巖つきの見上ぐる上。草蒸す頂に人ありて、目の下に聲を懸けた。樵夫と覺しき一個の親仁。面長く髪の白きが、草色の針目衣に、朽葉色の裁着穿いて、草鞋を爪反りや、巖端にちよこなんと平胡坐かいてぞ居たりける。

その岩の面にひたとあてゝ、両手でごし／＼一挺

の、きらめく刃物を悠々と磨いで居たり。

磨ぎつゝ、覗くやうに瞰下して、

「上へ來さつしやい、上へ來さつしやい、浪に引かれると危いわ。」

といふ。浪は水晶の柱の如く、倒にほとばしつて、今つツ立つた廉平の頭上を飛んで、空さまに攀づること十丈、親仁の手許の磨ぎ汁を一洗滌、白き牡丹の散る如く、巖角に翻つて、海面へざつと叩く。

「をぢご、何を、何をしてござるのか。」と、廉平は故と落着いて、下から先づ聲を送つた。

「石鑿を研ぐよ。二つ目の濱の石屋に頼まれての、今度建立さつしやるといふ、地藏様の石を刮るわ。」

「や、親仁御がな。」

「おゝ、此方衆は其の証文のぬしぢやろ。然うかの。はて、道理こそ、婆々どもが付き纏ふぞ。」

婆々と云ふよ、生死を知らぬ夫人の耳に、鋭く其の鑿を以て挟るが如く響いたので、

「もし、」と兩膝をついて伸び上つた。

「婆とお云ひなさいますのは。」

「それ、銀目と、金目と、赤い目の奴等よ。主達

が功德くどくでの、地藏ぢざう様が建たつたが最後さいごぢや。魔物まものめ、居處ゐるじこがなくなるぢやで、さま／＼に崇たつり居をつて、命いのちまで取とらうとするわ。女子衆をなごしゆ、心配しんぱいさつしやんな、身體からだは清きよいぞ。」

とて、蔘のみをこつ／＼。

「何様なにさま其それぢや、昨日きのふから、時々とき／＼黒雲くろくもの湧わくやうに、我等われらの身體からだを包つみました。姿々ははといふは、何なにものでござるぢやらう。」と、康平けんぺいは揖いっしながら、手てを翳かざして仰あふいで一言いちごんつた。

皺手しわでに呼吸いきをハツとかけ、斜なめに丁ちやうと鑿のみを押おさへて、目め一杯いつぱいや海うみを望のぞみ、

「三千世界せかいぢや、何なんでも居ゐようさ。」

「何處どこに、あの、何處どこに居ゐますのでございます

え。」

「それ／＼其處そこに、それ、主ぬしたちの廻まはりによ。」

「あれえ、」

「凡およそ其奴等そいつらがなす業わざぢや。夜よ一夜ひとよ踊をどりをつて騒さわぐ、しいわ、畜生ちくせいども、」

と八やたと見みるや、うしろの山やまに影かげ大きく、眼まなこの光ひかり

爛々として、知る是天宮の一將星。

「動くな！」

と喝する下に、どぶり、どぶり、どぶり、と浪よ、浪よ、浪よ渦くよ。

同時に、衝と其の片手を擧げた、掌の寶刀、稻妻の走るが如く、射て海に入るぞと見えし。

矢よりも疾く漕寄せた、同じ童が艫を押して、より幼き他の兒と、親船に寝た以前の船頭、三體ともに船に在り。

斜めに高く底見ゆるまで、傾いた舷から、二人半身を乗り出して、うつむけに海を覗くと思ふと、鐵の腕、蕨の手、二條の柄がすつくと空、穂尖を短に、一齊に三叉の鋒を構へた瞬間、疊およそ百餘疊、海一面に鮮血。

見よ、南海に巨人あり、富士山を其の裾に、大島を枕にして、斜めにかゝる微妙の姿。青嵐する波の彼方に、莊巖なること佛の如く、端麗なること美人に似たり。

怪しきものゝ血潮は消えて、音するばかり旭の影。
波を渡るか、宙を行くか、白き鷺鳥の片翼、朝風に
傾く帆かげや、白衣、永紅色、水淺黄、ちら／＼と
波に漏れて、夫人と廉平がイめる、岩山の根の岩に
近く、忘るゝばかりに漕ぐ蒼空。魚あり、一尾、舷
に飛んで、鱗の色、恰も雪。

【完】

―― 篇中の妖婆の言葉（がぎぐげこ）は凡
て、半濁音にてお読み取り下されたく候――

